

---

## クローバー（2）

ディライト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローバー(2)

### 【NNコード】

N4267Z

### 【作者名】

デイライト

### 【あらすじ】

あれから2ヶ月。奇妙な同居生活もすっかり落ち着いた草野春樹と碧原一葉、二葉、三葉の4人。騒がしくも平穏な毎日を取り戻し、有意義な日々を送っていた春樹だったが、それは長くも続かないようで・・・。クールなクラスメイト花咲嘉穂に惑わされたり、同居バレ恐怖のゲームパーティーに、二葉にまさかの求婚者が現れたり・・・!相変わらず春樹の周りは慌しい。

ああ、俺の平穏な日々が・・・。日常ホーム&ラブコメディ、クローバーシリーズの第2弾!

いつも、デイライターと申します。クローバー（1）のつづきとして（2）をスタート致します。前回の小説を読んでいただけた方、本当にありがとうございました！（2）をクリックして頂けた方、完結済みである（1）の方から読んでいただけるとお話がわかります。今回も遅筆ながらのほほんと書いて行きたいと思つておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

だいたい全10回を予定しており、1回が約7000字～8000字くらいです。

こんな小説ですが、感想評価などいただけた日には、できもしないバク宙をやつちまつぐらじ喜びます。  
では、今回もよろしくお願ひします！

クローバー（2）スタートです！

## クローバー（2）

6月の初め。季節は春の色を消し落とすべく、長きにわたりじめじめとした雨を降り注がせる。

夏の訪れを感じさせ、傘が手放せなくなるこの頃、新しいクラスの面々にも違和感を感じなくなり、平和と怠惰を心から愛する俺、草くさのはるき野春樹はようやく平穏といつぱりにありつけていた。

4月のあの出会いから、俺の生活は一変した。

俺の悩みでもあるにつく栗色髪がたまたま学校一の御令嬢美少女、碧原一葉の髪色と同じだったことで、俺は彼女とニアミスしてしまった。その事をきっかけに、なんの因果か一葉のアパートの火事現場に居合わせた俺は、一葉とその妹二葉と三葉を匿つたことで、俺達は辛くも同居生活をすることとなつた。

そのことで、色々問題もあつた。

2ヶ月経つた今でもこの事は内緒であるし、親しい友人に嘘をつき続けている罪悪感もある。同級生の男の家に居座つてるなんてのも大問題だ。でも俺は、俺の我が儘で、彼女達に残つてもらう事にした。土下座までして。本当にどうかしていたとは思う。平穏を愛する俺が、まさか自分から泥沼に足を踏み入れたんだから。でも、そんな泥沼で遊んで泥まみれになるのも悪くない。それは一葉と出会つてから身を以つて知つたことだ。

ツ！？

突如腹の辺りに感じる重みと痛み。

2ヶ月前の走馬灯がぐにゃりと形を成さなくなる。

「ハルキハルキ！ もう朝だぞー！」

重たい瞼を持ち上げて、腹の辺りで馬乗りでゆわゆわと俺を揺らす  
その姿に眼を凝らす。

「・・・ん、フタバか・・・・・・」

薄い水玉模様のパジャマ姿に、空も飛べそうな寝癖のついた栗色シ  
ヨートカツト。小学6年生にしては無邪氣すぎるテンションに、整  
いすぎている顔の造形は妙に似つかわしこよつにも感じじる。

「もう」飯できてるよー。」

朝から直射日光のような笑顔を向けるのは碧原家次女—葉だ。首を  
傾げながら布団に収まる俺の上で横揺れする。

「・・・へ？ なんで？」

あれ、今日は朝飯当番は俺のはずだし、とこつかなんで—葉が起  
しに・・・。

俺ははつと気づいて、首だけ回して目覚まし時計に眼をやる。  
その時計は無情にも3時23分を指したところで時計としての仕事  
を放棄して眠りについていた。

「うおおおおー！ 時計止まつとるーー！」

「わあー！」

俺が慌てて起き上がりたために、俺に乗っかっていた—葉はこころん  
と後転する。

「だいじょうぶ！ ヒトハが作ってくれたからー。」

「え、マジか！？」

側にあつた携帯で時間を確認する。学校には十分間に合ひ時間だ。  
こづこう時のために少し早めに起きるよつとしている。俺は一先ず  
ホツと一息ついて布団から出る。しかし、一葉がいなかつたら朝飯  
は抜きとなつていたことだらけ。

「 つと」

俺は思い出したように、俺の隣で今だ眠り姫のよつて眠りつづけて

いる少女に目を移す。

「ミツバ、朝だぞー」

横向きで幸せそうに寝息を立てている彼女は碧原家三女二葉みつばだ。

「…………」

穏やかな表情から一転して、顔をくしゃっとさせて身体を起<sup>く</sup>す二葉。

「…………おはよ……ハルキ」

二葉は囁くように静かに微笑む。起き上<sup>が</sup>ると同時に薄い桃色のパジャマが見える。寝起きのため、今は背中越しに流れる綺麗な栗色髪だが、普段は束ねて右肩に下げるサイドボニー<sup>テール</sup>にしている。姉に同じくして整いすぎていてる顔の造形に、小学4年生とは思えないほど落ちついている大人しい娘だ。

「おはよミツバ。ヒトハが飯作ってくれたみたいだから、着替えてこい」

「…………うん」

ゆっくりと布団から出ると隣の空き部屋を宛てがつた碧原三姉妹の部屋へと引っ込んだ。

「もー！ ミツバのヤツすぐハルキの布団に潜り込むんだ！」

二葉が腰に手をあてて頬を膨らませる。あの風の強かつた夜を境に、三葉はよく俺の布団に潜り込んでくる。了解を得る場合もあれば、朝起きるといつの間にという事もある。気付かず寝返りをうつて押し潰してしまわないか懸念しているところだ。

「まあいいじゃんか。なんならフタバも一緒に寝るか？」

俺が何の気なしに問うと、二葉は俺の布団をちらりと見て、すぐに顔を赤く染めた。

「ね、ねないよ！ これでももう6年生だし、来年は中学生になるんだぞ！ そんな子供っぽいことできないよーだつ！」

べーっと舌を出した後、ついつとそっぽを向いて二葉も着替えるためか、二葉にあやかるように部屋へと消えていった。二葉の方がよほど子供っぽいぞと言つてやりたかったが、ぎりぎりのところで飲

み込んで苦笑した。

そんな一葉を見送つて、俺も自分の支度へ取り掛かる。といつても布団を畳んで後は着替えるくらいしかないので。俺はさつさとブレザーだけを抜いた制服姿に着替えて居間キッチン兼用スペースへと向かつた。

「あ、ハルキ寝坊！」

部屋を出ると、ちょうど朝食のスクランブルエッグをテーブルに運んでいるエプロン姿の女子高生がいた。

「わ、わるい、目覚まし時計が止まっちゃってさ・・・」

俺はぶらんと摘むように、寝坊の原因を作った犯人を見せ付ける。

「もう・・・私が起きなかつたら完全に遅刻だよ？」

お母さんのように口を尖らせて、俺を上目遣いで睨む。はつきり言えばまるで怖くないどころか俺の中の可愛い表情ランキングベスト3に入るだろう彼女の表情だ。ちなみにあと二つは・・・まあおいおい教えてやろう。

制服にエプロンという格好で頬を膨らませているのは、碧原家長女一葉だ。誰もが振り向く美貌を欲しいままにしている彼女は、俺と同じ学校に通う同級生。枝毛一つも見当たらないような腰辺りまで流れる綺麗な栗色ストレートヘア。何の汚れも知らないような瞳とその宝石を守るような長い睫毛。滑らかな曲線を描く鼻に、桃色の弾けるような、それでいて柔らかな唇。そして美人というだけに留まらせない、幼さも残すふわりとした輪郭に、女性の中でも小柄な体躯はそれをさらに際立たせる。しかしisorとこころはきつちり出でいるといったように、これ以上を求めようのない総てを手に入れている彼女こそ、碧原一葉その人である。しかし、それでも天は二物を与えないらしく、一葉は学校では近寄りがたい御令嬢という不名誉かつ理不尽なレッテルを今でも貼られている。まあ色々原因があるのだが、いまだ解決するに至つてはいない。俺達と友人として付き合うようになつてからは、以前よりはだいぶ良くなつたと思うが。そのため、学校での友人はあまりに少ないのだ。でもいざれこれに

ついても俺が解決してあげたいと思つてゐるのだが、いかんせん俺も社交的な性格でないため、期待薄である。

「ほり、寝癖直して、はやく食べよ?」

「おう!」

同居生活を始めて早2ヶ月が過ぎ、俺達のこの生活の中でもはや遠慮という2文字は完全に消え去ったと言つてもいい位まで落ち着いていた。あの時の選択はやはり間違つていなかつたのだ。そのお陰で今の平穏な生活がある。そして俺はこの素晴らしい現状を大事にしていく。そう心に決めたのだ。

ルキ ! クサノハルキ!

拡声器のような音量で俺の名を叫ぶ方角へと突つ伏していた顔をあげる。

「草野! お前はなんで朝のホームルームから爆睡状態に入っているんだ?」

視界の定まらない眼を凝らすと、白いタンクトップに青ジャージの体育会系マッチョマン、我が2-D担任岩崎<sup>いわさき</sup>勲夫(だが担当数学)教諭が、持つているチョークを今にもやり投げの如く投げ付けようとしているのが見える。

「・・・んあ、すんません・・・・・・

周りを見渡すと、見慣れたクラスメート達のクスクスと笑う姿。俺の席は一番後ろの中央で、どうやらタッパのある岩崎教諭からは丸見えらしい。一番前の席では、列の人々の横からひょっこりと顔を覗かせて笑いを堪えている一葉の姿もある。

岩崎教諭は、仕様がないなと言つた感じに大きく溜め息をつくと、すぐにホームルーム終了のチャイムが鳴り響いた。

「ハルっちゃん、今日は一段と眠そうじゃん？　どつたの～」  
チャイムと同時にクラスメートが掃けると、それと同時に腐れ縁、筑紫正志がチャラ男全開の笑顔でやつてきた。筑紫は、俺よりも明るめの金髪に近い茶髪のトップを立たせて、片耳ピアスにおしゃれな黒縁メガネをかけている。そして首周りにはいつも欠かさず身についている、6月ではそろそろ首もどが蒸れそうな長い紫色マフラーを巻いている。登下校時には特大のヘッドホンとスケボーを相棒にする正真正銘のチャラ男である。

「昨日夜中にな・・・・・・

俺は前の不在の席に座った興味津々な筑紫に、眠そうな眼を向け答えようと口を動かしたが途中で止めた。

「なになに！？ 気がつくと隣に美少女でもいたってか！？」  
アホさ満載な発言をする筑紫だが、実はあながち間違いでもないため、俺は少々肩をびくつかせる。

時計で確認したときは1時半過ぎだつただろうか。三葉が俺の部屋の襖を開け、そのまま真っ直ぐに俺の布団内へと侵入を図ってきた。昨日はたまたまその時に起きていたせいもあって、三葉が気になって完全に寝不足である。三葉は完全に寝ぼけていたらしく、俺の背後へ回つたと思つたら、何を勘違いしたか俺を抱き枕と認識したらしく、俺の背中にかなり長い時間腕を回していたのだった。

「アホか」

といつてもそんな事実を簡単に口に出せるわけもなく、親友の妄言は妄言のままでうつちゃる。

そんな冷たい俺の言葉に、筑紫はまるで可愛くないうつるとした瞳を向けるが、俺は気付いていないようにそっぽを向いた。するとその視線の先にもう一人の親友の姿があつた。

見上げると、いらっしゃるほど爽やか笑顔を振り撒いて、佐久間

さくまけ

恵介がこちらにやつってきた。

「ハルキ今日も眠そうだな」

アホな親友と発言レベルが同じな佐久間だが、その正体は学校の女子生徒のアイドル的存在。大人しく見せる黒髪無造作ヘアーだが、整った顔にどこぞの芸能人的愛想。学業優秀、スポーツ万能。もつ描写するのも馬鹿馬鹿しくなるほどのイケメンのお手本である。

「お前ら俺を描写する時絶対に『このいつも眠そうな』から入るだろ」

「？ なんの話だ？」

「何でもない。こっちの話だ」

いつもの眠そうな眼で筑紫と佐久間を睨む。

「ねね、ハルっちゃん！ 近々ハルっちゃん家に行つていい？」

「はあ！？ な、なんで・・・？」

急な筑紫の発言に思わず声が上擦る。閉じかけていた眼もついに開く。

「だつてさ、2年になつてから全く行つてないじゃん？ おばちゃんにも挨拶したいし、つかハルっちゃんちにあるWeeが面白すぎてちょくちょく通いたいくらいなんだよ！」

「ああ、あのテニスのか！ 面白いよなあれ」

佐久間も同調する筑紫の言うWeeとは感應型コントローラー対応のゲーム機である。そういうれば押し入れにいれっぱなしですっかり忘れてたな。今度四人でやろう。二葉と三葉喜ぶぞきっと。

「というわけで、今度俺らを楽しませてくれ」

お前らは喜ばんでいい。

「ナニナニッ！？ なんの話してるんだい？？」

三人でだべっていると、話が聞こえたらしいクラスメイトにして一葉の唯一の親友である枝村葵が、跳ねるようなステップで俺の背後から顔を覗かせる。彼女はとにかく元気印。肩まで伸びる薄茶色の髪の毛に前髪を留めるための青い髪留めがトレードマーク。大きな瞳に猫のような特徴的な口角。美人というよりも可愛いらしさの仕草

の多い、明るく笑顔の眩しい女の子である。

「おはよアオイちゃん、Weeeって知ってる?」

筑紫が後ろで俺の両肩に手をかけている葵に問い合わせる。

「おはよ筑紫くん! ゲームだよねっ! あのCMでやったやつ!

葵がスカートを翻しながら、見えないテニスラケットを振る。

「そそ、それが何故か一人暮らしのハルちゃん家にあるんだよこれが!」

「マジかい!? そりやす!」

大袈裟に驚いて持っていた透明ラケットを放る葵。

「なんかの抽選で当たったんだよ」

筑紫め、余計なことを。この流れだときっと。。。

「よし! ジャあ今度ハルキンちに皆で集まるか!」

佐久間が何かいいことでも思い付いたように立ち上がって提案する。サクマこら! お前サクマじゃなくてアクマだろ!?

どう考へても俺を陥れようとしているとしか思えないぞ。

「いやいやいや! 無理だつて! 俺の部屋に8人も人が入るわけねえよ!」

「8? 春樹と筑紫と俺と枝村と碧原と花咲で6人だろ? それぐらいいなら大丈夫じゃないか? 他にも誰か仲良いやつでも呼ぶのか?」

佐久間は指で数を数えながら首を傾げている。焦つて口が滑つた。つい一葉と三葉がいる前提の話をしてしまった。といふか呼ぶのかつてもううち来ることは確定かよ!?

「ちょ、待てつて! 俺の部屋汚いし、女の子をそんな部屋に入れるわけにはいかねえだろ!?

俺は半ば必死になつて反論する。実際は綺麗好きな一葉が隅々まで掃除してくれているので足の踏み場もないなんてことはない。

「あたしはあんまり気にしないよ?」

「俺! 俺が気にするの!」

気にするのは同居バレについてだが。

丁度俺が涙目で訴えている時に、天使の鐘が鳴った。1限開始のチャイムである。

「おし！」のまま「」の話はつやむやにしちまえば大丈夫だ！

「げ、授業だ・・・」

「うーん、残念」

「じゃあハルキ、来週までに部屋綺麗にしといてくれよ！」

「おう！ まかせとけ・・・つてはあ！？」

日々によるしきりやらまかせたゞなど人の気も知らない無情な言葉を残して、各自自分の席へと戻つていった。  
まずい。もう全く断る理由が無くなってしまった。実際一人暮らしのやつの家なんて友人にたむろしてくださいお願ひしますつて言つているようなもんだからな・・・。

しううがない。次の英語の授業は俺のあまり思わしくない頭を存分に捻つて代替案を考えることにする。

また面倒ごとが増えてしまった。

午前中の授業はうんうんと唸りながら必死に解決策を考えていたために、授業内容などは耳から耳を光速で通り過ぎてしまった。ただ先生方からは、考えている姿が勉学に意欲的であると見なされたらしく、何度も名指しで褒められてしまつた。まさかこんな不純な考えに浸つていたとは口が裂けても言えない。

昼休みは2年になつてからのお馴染みの面子、一葉、葵、花咲、筑紫、佐久間と昼食をとつたのだが、ここでも佐久間が余計なことをしでかしたために、来週の日曜日はハルキンちでWe eパーティーをするぞー的な流れにしやがつた。そのため、一葉から「大丈夫なの？」と「あとで話聞かせてもらうから」のありがたい目線を頂く

「ことなつた。

そして昼食を終えてからは結局思い浮かばなかつた解決策を、往生際悪く頭だけ机に載せて必死に考えている。

「日曜日楽しみね」

ハスキーな声で囁くよつに言つて、俺の前の不在の席に腰を降ろしたのは花咲嘉穂はなさきかほだ。

クールで知的な表情で妖艶に微笑する彼女は、胸辺りまで伸ばす黒髪を毛先でカールさせてふわりとした印象を出させる。それでいて凛と主張させる眉と奥二重の瞳、すっと伸びる鼻に、小さな唇。少々うつ氣がありそうなその表情も相俟つて、まさしく美人といつても差し支えないだろう。スタイルもよく着物がよく似合いそうだ。

「全然楽しみじゃねえ」

俺は机に顎だけ付けて顔をあげながらむすつと答える。

「あら、何故？ 男の子3、女の子3。言つてしまえば合コンよ？」

「・・・お前わかつて言つてんだろ？」

「ふふ、何を？」

悪戯に笑つて、こまかす花咲。

そう。何故かは今だに知らないが、花咲は俺と一葉の関係について、何やら色々と知つていそうな節が多くあるのだ。

4月に一葉との同居生活問題を解決した。その時、一葉を助けるために花咲は俺にどうすべきかを気付かせてくれた。事情も知らないのに。その前のショッピングモールハナオカでばつたり出会つてしまつた時もそうだ。いくら一葉と三葉を見たからと言つても、同居がばれないよう気をつけると釘を打つてきたことは気になっていた。そして俺は問い合わせた。一度は交わされた質問をもう一度振つたんだ。

『お前は俺と一葉のこと、どこまで知つていいの？』

と。花咲は少し思案するように歩を進めた後、真っ直ぐ俺を突き刺すような目線を俺に向けて、振り向きたまにこう言ったのだ。

『 知りたい？』

と。俺の答えはイエスだった。

しかし彼女は俺の求めている答えをくれなかつた。

音も立てずに口角をあげ、そして、

『 そのうちわかるわ』

と、最後は花咲に似合わない満面の笑みをくれたのだった。

「花咲・・・もう2ヶ月経つんだぞ。 そろそろ教えてくれたつて罰は当たらないんじやないか？」

「もう2ヶ月も経つのに、相変わらずあなたは私を名前で読んでくれないわよね」

少し口を尖らしながら、毛先のカールを弄る花咲。

「じゃあ力ホつて呼べばいいのか？」

「なんか私が強引に呼ばせてるみたいでヤね」

「実際呼ばせてるだろ」

花咲は座りながら足をぶらぶらさせていく。

「なんか距離感じるじゃない。」 一葉も・・・葵ちゃんも名前で呼んでるのに

ふいにそっぽを向いてそう呟く花咲。巻き髪だけしか見えなくなり、表情は伺えない。

「ん~、まあそうだなあ。でも慣れちまつたつてのもあるからなあ」

「そうじゃないわ」

「ん？ 何が？」

花咲の発した言葉の意味がよくわからず聞き返してみるが、花咲は首を横に振った。

「何でもない」

よいしょと零して、席を立つ。

「ふふ、日曜日あなたがどうでるのか、楽しみにしてるわ」意味深に微笑んで、花咲は一葉と葵の元へと戻って行つた。やつぱりあいつ絶対に何か知ってるだろ・・・。

「どうしてこうなったの…？」

木曜日の放課後、いつもの買い出しから帰ってきてすぐに、緊急会議が開かれる。勿論内容は、日曜日に草野春樹<sup>モモ</sup>に友人が遊びに来てしまうという、本当なら楽しみにしていていい筈のイベントについてだ。

「いや、なんというか流れで……」

「どんな流れよ、どんな！」

一葉がかなり困ったように頭を抱えながら、不用意な約束を取り付けてしまつた正座で反省中の俺を睨む。

気まずくなつて目線を逸らすと、一葉と二葉は夕方のアニメに食いついていて、我関せずを貫いているのが見える。

「筑紫のアホが急に俺の持つてるWeeをやりたいとか吐かしやがつたから……」

「筑紫クンのせいにしな……つてそういうえばハルキWee持つてたの？」

怒った表情から一転、はつとしたように驚きの眼を向ける。

「お・・・おう、前に雑誌の抽選に応募したら当たつたんだ。コントローラーもちゃんと4つついてる」

「ホ、ホントに…？ わあ～私一回やってみたかったんだよね～あれ！」

頬に手を当てながら、見えないコントローラーを手に腕を振る一葉。喜ぶのも無理はない。このWeeという次世代ゲーム機は発売から半年が経つというのに、今だに手に入れるのが困難というほどの超人気ハードなのだ。一拳手一投足を覚えてしまつほどにCMを流している癖に、在庫切れの連続で「これはあるある詐欺だ」なんて言われているほどだ。

俺は立ち上がり、Weeが封印されているだらう押し入れを漁る。

「確かこの辺に・・・」

「あのWeeをこんな汚い押し入れに閉じ込めておくなんて・・・。

ハルキは今全世界のゲームーを敵にしてるよ

「んな大袈裟な。・・・お、あつたあつた」

殆ど使つてない、パッケージの箱そのままにWeeは押し入れの奥で横たわっていた。確か以前1、2回筑紫と佐久間がうちに来てやつたきりだな。

「ほんと新品同様じゃない。こんな面白そうなのなんでプレイしないの?」

一葉が埃を被つていただけのほぼ新品Weeを見て零す。

「確かにこいつは時間も忘れるほど楽しい、今までにない画期的な

ゲームだ」

「ならなんで?」

「多人数ならな・・・アパートの狭い一室、夕方一人で架空のテニスラケットを振つている俺の姿を想像してみろ」

俺に言われると、一葉は首を傾げて下唇に人差し指を添えながら考えるポーズ。3秒ほど思い浮かべた後、何かを察したように眉をひそめた。

「・・・そもそもハルキが運動してる姿を想像できない・・・。

「そこから!?」

完全に急け者を見る眼だよねそれ!? まあ否定はしないけどー!

「要するに、一人でやるゲームじゃねえってことだ」

「そつか。それで皆でうちにきてゲームする・・・つてどういふことよー?」

一葉は本題を思い出したように眼を剥ぐ。

「つまり・・・やつうことなんだよ

「悟つたように言つくなっ!」

腕を組み、斜めに構えて答える俺に、一葉が得意のチョップを喰らわせてくる。馬場さんも顔負けだよ。

「うーん、でもどうしようつ……。階で楽しげゲームもしたいし……」

・かといって同居がバレるわけにも……」

一葉はWeeへの好奇心と同居バレの恐怖心とで板挟みになつて悩んでいる。

「もうあいつらには言つてもいいんじゃないかな?」

「ダメだって。言つたら絶対にまた葵が心配するもん。ていうかだから前もこれで悩んだんじゃない」

「それもそうだな……」

二人大きく溜め息をついて、テーブルに頬杖をつく。一葉はボーッと考えているようだ、田線は明らかにさつきから出しつばなしのWeeに向かっている。一葉と三葉に眼をやると、いつの間にかぽかぽかと小突き合ひを始めている。何やら好きなキャラクターで揉めているようだ。

もう何年も前からずっと一緒に住んでいたかのような安心感を感じながら、俺は一つ小さく息をはいて、夕飯の支度をするべく立ち上がりつた。

今日の夕食当番は俺だ。本来今日の朝食当番が俺だったのだが、田覚まし時計が突然の辞職の意を示しやがつたために、急遽交代となつた。

今晚は金田鯛の煮魚に、肉詰めオムレツで固めようつと考えている。金田鯛は刺身のままでも皿に盛り、酒蒸し、粕漬にしても大変美味だ。通年脂がのつていて、重宝している。

## ピンポーン

俺が調理しながら気持ち良く心の中で金田鯛の紹介をしていくと、家のチャイムが鳴らされる。

「あ、はいはーい！……悪いヒトハ、ちょっと今手が離せなくて……。代わりに出てくれ」

「うん、誰だる」

「この時間なら、おばちゃんだな。またおすそ分け持つてくれたのかも」

「ちくわわナ！――」へじやがかー？ なんたうじせーかー？ な  
んとかせんにかー？」

今にもよだれが出そうな表情で、来客者に顔を出そと玄関に向かう一葉の後についていく。その様子を呆れたように眺める三葉。もう何度も見た光景だ。

「はーい、今でもーす」

そう声をかけて一葉がドアを開いた。と、同時にじつんと鈍い音がしたと思えばからんからんと均等な軽い音を奏で始めた。

「アーティストの才能を引き出す」が、アーティストの才能を引き出す

「ええ！？」

一葉の驚く声も余所に、こちらからは見えないが、どうやら来客者

たと2階の廊下を音を立てて駆けていつた。

ようやく手の空いた俺は、事件の起った玄関先まで向かう。

一葉の証言を聞き、俺の心で嫌な予感が沸々と沸き上がった。

「そ、そいつが何しに・・・?」

お皿にと落としかば  
なれが筑前煮を打て  
くれかんだけと

一葉も落葉にまつたまゝに口を開く。

そう、以前大屋のおばちゃんに一葉をこのアパートに住まわせてやつてくれないかといふ顔を頼みにいつた時に、ちょろつと話に出たおばちゃんの一人息子の雄太（ゆうた）である。

何故わかるのか、理由は簡単だ。今まさに玄関に横たわっている皿はおばちゃんがうちにおすそ分けを持ってきてくれるときのプラスチック皿と同じ。そしてそんなおすそ分けを持つてくれるのはおばちゃんしかない。そのおばちゃんが来れず、代わりに派遣されたヤツが学ラン姿なら間違いなく雄太だろう。

それにしても、あの様子だとどうやらおばちゃんから話を聞いていなかつたらしいな。もう2ヶ月も経つというのに。

「あ～あ～俺達の靴にも飛び散ってるじゃねえか」

玄関という国に爆弾を投下していった雄太のせいで、靴という国民が多大な犠牲を払っている。こりゃ片付けが大変だ。

「きょうはもうなんとかぜんになしか！？ がーん！」

二葉が人生の終わりを迎えたようにひざまずいて頭を抱えている。

「くっそ～！ あのハゲゆるさないぞ～！ わたしの大事なんとかぜんにを～！」

雄太はハゲでないし、大事なのに筑前煮の名前を言えていないし。

二葉が盟友の敵かたきを打つように立ち上がろうとするが、再びチャイムが鳴る。

多分おばちゃんに事情を聞いて再びおすそ分けを持ってきてくれたのだろう。

「・・・おーい雄太～。開いてるぞ～」

俺が平坦に外の雄太を呼んでやると、申し訳なさそうに扉が開いた。

「・・・・・・」

「久しぶりだな雄太。もう零すなよ」

どうやら再びおすそ分けを持ってきてくれたらしく、先ほどとは違う皿に入れて持っている。今度は陶器のようなので、落としたら大惨事だ。

雄太は今年から花岡中にあがった中学一年生。中一にしてはかなり高身長であり、高校で中背の俺とほとんど変わらない。短髪のトップをワックスで下手に固めていて、頬にはかなりのニキビがある。着ている学ランをだらし無く開けており、どうやら中学に上がつて

妙に色氣づいたようだ。そして何よりもこいつは・・・

「ハ、ハル兄・・・。いつ結婚したんだよ！？」

「お前はおばちゃんから何を吹き込まれた！？」

「おばちゃんなんん！？ ちょっと最近本当に悪魔じみてるよね！？」

「だつて母ちゃんが『あの一人は夫婦みたいだよね～うふふ～』なんて言つてたんだよ！？」

何ゆつてはるんですかあのお方は！？ 紛らわしそうな…？

母親も母親なら子も子だよ！

そうだよ、こいつはとんでもなくアホなヤツだつたよ！

歳を重ねていない分、筑紫よりアホと言えよ。

怒つていなかと一葉の表情を伺うと、やはり俯いて顔を真っ赤に染めている。

この類の話を持ち掛けられると、毎回「うなんだよな。

「ちょっとまで雄太！ とりあえずあがつてけ！ 説明するから」

「ダメだよハル兄！ そんな二人の愛の巣に上がつてしまつなんて俺にはできない！」

ダメだ、話が通じねー！

雄太を家に引きずり込むまでに5分を要し、よつやくお茶を出すとここまでこぎつけた。

「・・・ハル兄・・・。もう子供いるの・・・？」

「お前はそのはやどちりの性格をどうにかしろ！？」

二葉と三葉を交互に見ながら、驚きすぎて大声も出せないといった様子。一体どうすればあのおばちゃんののほほんとした遺伝子からこれが生成されちゃうのだろうか。

そんなことを考え大きく溜め息をつく。仕方がないので不思議そう

に眉を潜める雄太に、この2ヶ月間の日々の事を話してやることにした。雄太と学校が被るやつはないし、おばちゃんの息子だから大丈夫だろうということからだ。というかこのまま放っておいたらあることないと近所で言い触らしそうな勘違にようだったからな。

「な・・・なるほど・・・」

「わかつてくれたか雄太」

「それで今付き合ってるつてことかハル兄！」

こいつに期待した俺がアホだった。

ほらほら、一葉も切れる寸前だろうが。  
「わかつたわかつたもうそれでいいから、とりあえずこのことは誰にも言うなよ？」

「おうよー、俺はこれでも口は鉄ぐらい堅いからー。」

それあまり堅くないよね。せめて嘘でもダイヤモンドと言つて欲しいよ。胸をどんどん拳で叩いて、簡単に滑りそつな口を尖らせる。

「それでさ、ハル兄」

「・・・なんだ」

もつあまり話さないでくれないかな。

俺は喋り疲れて多少不機嫌を顔に出し、頬杖をつきながら睨む。

「少し・・・一葉さんと話をさせてくれないかな？」

「フタバと？」

何故と口を開く前に雄太はさらに口を開く。

「お、俺、さっき玄関先で『勿体ない』って言われた時の一葉さんに惚れちまつたみたいなんだ！」

「そうか・・・・・つてえええええ！？」

藪から棒に何言い出してんだこいつ！？ つていうか惚れるポイントが斬新だな！？

雄太は耳まで真っ赤にして、でかい団体に似合わない表情をしている。

「ななななんなんなんなんなんなんなん！？」

先ほどまで俯き聞いていた一葉も、あまりの仰天発言に言葉を発せずにはいられない。

「さつきからハル兄と話しても一葉さんの顔ばかり思い浮かぶんだ・・・。ハル兄の普通でつまらない顔になんてさつきから一瞬たりとも目がいかないよ」

雄太後で覚えとけよ。まあ普通ってところはいいんだが。

「・・・それで、フタバとちょっとくら話がしたいと?」

「できればたくさんしたいけど」

図々しいな。

「ど、どうするヒトハ?」この手の話はフタバにはまだ早いんじやないか?」

俺は一応姉妹の長である一葉に尋ねる。すると一葉は急にクスッと笑いながら答える。

「べ、別にいいんじゃない? 話をするぐら、・・・ふふ

「でもなあ・・・ってなぜ笑う?」

なにやらかなり可笑しそうに口元を押さえながら笑うのを堪えている。

「だ、だつて・・・、ハルキの発言が頑固親父みなんだもん」「う、うるさいな! ま、まあヒトハがいいつて言うんならいいんじゃないか! ?」

顔が赤くなるのがわかる。一葉は俺のこの言葉もツボに入ったようで腹を押さえて声にもならない笑いに満たされている。

もう一葉は無視して、一葉達の部屋で二葉と遊ばせていた一葉を呼びに向かう。

「おーいフタバ、雄太のやつがおまえとお話したいってよ?」

「ゆうたってだーれ?」

「ああ、さつき筑前煮持つてきてくれたやつだよ」

一葉は顔と名前が一致したようで、急に苦虫を噛んだような表情に変わる。

「あいつかー! オオヤのぜんにをめぢやくぢやにしたあいつかー

！」

「そう、そのあいつだ」

いきなり好感度最悪な一葉は立ち上がり、右の拳を高々とあげて、「はなしやいをよーきゅーするつ！」

と叫んだ。確かにさつきのアニメの台詞だなそれ。その様子を三葉が頬を染めながら見ている。え、何三葉もやりたいのかこれ？

「よし！ しゅつづ～き！」

話し合いで要求として、ものの一秒で出撃宣言を出した一葉は、勢いよく部屋から飛び出した。取り残された三葉と田が合つ。三葉も来るかと田で問うと、「クリと言葉なく頷いて、俺の手を取つてきた。最近は何をするにもべつたりくつづいてくる三葉である。三葉の手を引きながら居間へ向かうと雄太と一葉がテーブルを挟んで正座で向かい合つている。そして将棋の対局時で言えば、一葉はタイムキーパーの位置だ。雄太は額に汗を滲ませながらきょろきょろと田を泳がせ緊張した面持ち。一葉もまた険しい表情ながら、緊張とは違う、何やら可愛い顔で口を尖らせながら睨んでいる。この図だけ見れば蛇に睨まれた蛙の図。ただ蛇側があまりに可愛らしいので、この言葉は似合わない。そして真ん中で戦況を見つめている一葉は、どうしていいかわからずに入り組んで二人を交互に見ながらおりおりしている。蚊帳の外である。

そんな途中参戦はしにくい状況ながらも、俺と三葉は一葉の向かいに腰を下ろす。どうやらそれを皮切りに筑前煮と恋心を巡る正義と悪の熱い戦いの火蓋が切つて落とされたようだ！ ってなんじゃそりや。

「ふ、一葉さん！」

口火を切つたのは雄太だ。定まらなかつた田を一葉に向ける。

「なんじゃ！」

一葉も交戦の構えだ。腕を組みながらつんつと上から覗き込むように見る。よし、可愛いぞ一葉。

「あの・・・」趣味は・・・？

まるで初々しいお見合いのような質問で攻撃に出る雄太。緊張のし過ぎで照準が上手く定まつていないうだ。

「食べる」とじや！なのに先ほどいたかがわたしの前でせんに落としたよ!じやが？」

どこぞの将軍のように話す一葉。鋭いカウンター攻撃を喰らつた雄太は肩をびくつかせる。

「あ、あれはちょっとした事故ですね、一葉さんのためなら毎日でも作つて持つてきたいと考えている所存であります！」

慌てて將軍に深々と頭を下げる雄太。どこでそんな言い回し覚えたんだよ。ていうか作つてるのはおばちゃんだよ。

「え！？ 毎日！？ それはちょっと参っちゃうな～」

自分の後頭部を撫でながら、夢のような提案に頬を綻ばせる一葉。現在一葉の頭の上では筑前煮のソファードに座つて高笑いをしている姿が浮かんでいる筈だ。

「そ、それですしね・・・。一葉さんにこの場を借りて言いたいことがあります・・・」

どれでなのはわからぬが、雄太はここでリーサルウェポンを放つことに決めたようだ。雄太のこれでもかといつ程に赤い顔がそれを物語つてゐる。それを感じてか、向かいの一葉もそんな雄太を期待の眼差しで見つめながら、ほんのり頬を赤く染める。隣の三葉の唾を飲み込む音が聞こえる。俺もなにやら緊張してきたぞ。

緊張を解すために俺は先ほど用意してあつた冷えたお茶に手をつけ る。

「なんじゃ！」

「結婚を前提にお付き合いでしてください！――」

俺は口に含んでいたお茶を盛大に吹き出した。雄太に。

「あ！？ 汚つ！ なにすんのハル兄！？」

「いきなりすぎるだろ！？ まだボーライミートガールして30分も経つてないよ！？」

思わず発音の悪い英語で表しちゃうほどに動搖したわ！？

一葉も向かいでちょっと可笑そうに口元を押さえる。三葉は何故か頬を染めて固まっている。

「俺はてっきり友達になってくれとかそんな感じかと思つてたよ。。。遊びに行くとかや。。。」

ほらみる、あまりに突然すぎる告白に一葉は口をぽかーっと開けて呆然としているじゃないか。

「そ、そっか。えと、じゃあ一葉さん、俺と友達になつてください！」

雄太の言い直しにはつと気づいた一葉は、

「え、え～・・・どうしようかな～。。。」

と何やら満更でもなさそうに雄太から田を逸らしてもじもじしている。先ほどの将軍が嘘のようだ。といつかこんなしおらしい一葉は大変貴重である。

「そうだ一葉さん！ 今週の土曜日、遊園地に行きましょう！」

「え！？ 遊園地！？」

雄太の提案に一葉はまたも心を揺さぶられ、テーブルに手をついて身を乗り出す。

そして何故かちらりと俺を横目で見る。

「・・・行つてきたらいんじゃないか？」

遊園地と聞いてあまりに嬉しそうな顔を見てしまつたため、雄太と二人きりつていうのはあれだが、否定するのも憚られたため渋々了承してやる。

「・・・・・・みんなも一緒にいい」

一葉が視線を落としながら、口を尖らせる。

「・・・おし！ ジヤあ土曜日皆で行くか！」

「ほんと！？」

一葉がきらきらとした眼を向ける。

「それいいね！ そのほうが雄太くんもフタバと友達になりやすいんじゃないかな」

一葉も胸の前で手を合わせて嬉しそうに笑う。

「・・・・・遊園地か・・・・」

三葉も頬をぱら色に塗つて、頬を綻ばせる。

「雄太もそれでいいか？」

「もちろん！ 一葉さんと一緒にならたとえ火の中水の中だよー。」

そりや俺らを火に例えてるのかい？

「やつたあ！ ゆうえんちだー！」

うさぎのようにと飛びはねて、満面の笑みを振り撒いている一葉。それからはつとして雄太に向き直る。

「おぬし！ なかなかいいやつじゃ！！」

びしつと雄太を指さして、悪戯な表情を向ける一葉。雄太は一葉の人差し指から出される見えない光線で撃ち抜かれるように、後ろに倒れた。

そんな様子を皆一緒に笑いあつた。夕飯の用意は渉らなかつたが、これこそこの言葉で締めてもいいだろう。

「まあいいか

俺は小さく一息ついてそう呟いた。

雄太はいい返事を貰い、意気揚々と去つて行つた。

「雄太くん、男らしかつたね」

一葉が調理している俺の後ろから声をかける。

「あいつは何も考えてないだけだろ」

「でもしつかりフタバの心を掴んでいったよ？ その辺り、どう思われますかお父さん？」

その言葉に、両手で頬杖をつきながら悪戯に笑つている。

「・・・別にどうも思わねえよ」

少し不機嫌に見せてやると、一葉独自の解釈でそれを受け取つたらしく、

「あれ？ もしかして妬いてる？」

と更に口元を上げる。

「何にだよ」

「雄太くんにフタバをどちらちゃいそなこと? それとも私が雄太くんを男らしげって言ったこと? どっちだろ~な~」  
一葉はこちらに近づいてきて、俺の中を覗き込むように見つめてくる。俺の心臓が驚いたように跳ねる。頬が熱を帯びたように熱くなっているのを感じる。

「・・・あれハルキ? なんか私たち重要な何かを忘れてない?」

「・・・へ? な、なんかあつたっけ?」

顔を近づけていた一葉は、そのままの状態で唐突に思い出したように話を変える。思わず素つ頓狂な声が出てしまった。

「・・・まあいつか」

この時は日曜日のゲームパーティーの」となんてすっかり頭の中から抜け落ちていたのだった。

ドアの向こうに突然人が立つていたら、皆様なりびつするだろ？  
まあ大抵の人は驚いて後ろに後ずさるか、そのまま床に無様に尻餅をつくのかもしれない。そして、「びっくりしたなーもうー」などと笑い話で済むのだろう。

俺達は現在その状況にある。学校へ向かうため、俺と碧原三姉妹は意気揚々と、今日一日のスタートである扉を外側へと開いたのさ。そしたら、

「一葉さん、おはよーいります。あなたの王子がお迎えにあがりましたよ」

一本の赤い薔薇を口に加えた、短髪学ランでおばちゃんの一人息子である自称王子こと雄太がかなり気色の悪いポーズをとりながら現れたのだ。

もうね、びっくりして腰抜かすとかじゃないよ。あまりの哀れさに俺は無表情のままに扉を閉めてしまつたくらいだ。

「…………今誰かいなかつた？」

俺の影に隠れてよく確認できなかつた一葉が眉にしわを寄せながら問う。

「氣のせいだ。たぶん、きつと……いや、そうであつてくれ……

・・・・

俺が動搖を隠すように頭を搔くと、また勢いよくドアが開かれる。

「ちよつとちよつとハル兄！ なんでドア閉めるのさあー・・・つてあいた！ 薔薇の刺とげが唇に刺さつた！」

顔を見せるなり抗議の構えを見せる雄太は、薔薇をくわえたまま口を動かしたために、薔薇からの洗礼を浴びている。

「・・・雄太知つてるか？ 何故薔薇に刺があるか。それはお前みたいな自称バカ王子にくわえられないように進化してきたんだぞ」「ちょ！？ マジで！？ 進化つてすごいなー！」

この通り皮肉も通じないバカ王子である。

「あー！ おまえなんでまたいるんだ！？」

一葉のさら後に後ろで、まだ靴を履いていた一葉が、雄太の姿を見つけて青汁を飲んだような顔を向ける。昨日でかなり慣れたのかと思つたが、そうでもないようだ。

「一葉さん！ お迎えにあがりました！ 小学校までお送りいたしますよ！」

雄太はその場で片膝をついて、王子がお姫様に求婚するときのポーズで一礼。

「なにいってんだ！ ヒトハとハルキがついてくれてるからいらぬいよ！」

一葉は本当に嫌そうな表情で、一葉の影に隠れている。

「お姉さん！ 一葉さんの送迎はわたくしめに！」

「だれがお姉さん！？」

一葉を早々にお姉さん呼ばわりして、キラキラとした汚れまくらの眼を向ける雄太。

「送迎つたつて、そんなことやつてたらおまえが遅刻するわ！」

「心配いらないよハル兄！ 僕は遅刻には慣れてるからね！ それに、だから今日は早起きしてここで待つてたんじゃないか！」

グッドサインを自分の顔に向けて、先ほど刺が刺さつて血が滲んでいる脣をにやけさせる。血變する二つちやないだろそれ。

「だからお願ひ！ 一葉さんと一緒に登校させてください！ おねがいします！」

もはや王子など見る影もなく深々と土下座する雄太。好きな女の子と登校するのに土下座しなきやならないなら僕は一生できなくていいとさえ思えてくる。

それほどまでに惨めである。二つの間にか口から落ちて床に転がっている薔薇が妙に哀愁を漂わせている。

「つづ・・・」

その哀れな様子を間近で見てしまった一葉は、心底嫌そうな顔なが

らも断れなくなり、やむを得ず首を小さく縦に振り、雄太と共に学校へと向かうことになつた。俺達がちょっと後ろでついて来る条件に。まあ麓までは一緒だからな。

るんるん気分で鼻高々の雄太と、既に一日を終えて帰宅途中のサラリーマンのような表情の一葉を伴つて下へと降りていく。5人も一斉にこのボロ階段に集結すると、今にも崩れそうな音を立てている。

「ハルキ、この階段本当に大丈夫？」

5人分の重みに悲鳴をあげている階段を見て、一葉が心配そうな声をあげる。

「だ、大丈夫じゃないかな・・・」

一応そう答えておいたが、揺れが凄いし音も豪快だ。そろそろ寿命だろこれ。

お年寄り階段には厳しい負荷をかけながら下へ降り立つと、おばちゃんがいつも通り掃除をしていた。逆におばちゃんがいなかつたら学校休んででも探しにいきそうだ。

「おばちゃんおはよ

「おはよ「ひ」ざいまーす」

それそれで挨拶をする。

「あらみんなおはよ。」「めんね～昨日は雄太が迷惑かけたみたいで～・・・

おばちゃんは挨拶で一回、雄太の件で一回ずつ深々とお辞儀をする。「いやいや、そんなこと…」

あるけど。昨日靴と玄関の掃除が大変だつたんだ。しかしそれは口に出さず、俺達は釣られるようにお辞儀を返す。

「母ちやん！ 俺、一葉さんと結婚するから…」

思わず何も無いところで滑つてしまつた。

「お前は見境なく妙な宣言をするんじゃない！？」

「お、おまえとケッコンなんかしないぞー！ へんなこと「うなー」

一葉も俺に負けじとブーイングを送る。

「やつなの～。がんばってね～雄太～」

おばちゃんそれ、皮肉で言つてるんだよね？ マジで応援していないよね？

おばちゃんは胸の前で手を合わせて、くしゃっと頬を緩ませている。

「任せとけ！ それでは一葉さん、参りましょ～！」

「ひひ・・・・」

すっかり天狗になつてゐる雄太の声に、本当に仕方なくと言つた様子で小さい歩幅で隣に並ぶ一葉。一度言つてしまつた事を律儀にも全うする姿はそれはそれで可愛いらしく、まあ雄太と共につてところが大変不憫であるが。

「じゃ、じゃあおばちゃん行つてくれるよ

「は～い、いつてらひしゃ～い」

おばちゃんはマシコマロのような笑顔をくれて、俺と一葉と二葉も、後についていくことにある。

「ん？」

しかし、前に進もうと足を出すると、これまでずっと手を繋いでいた三葉の足が動かない。よく見ると俯いてしまつてしまつてゐる。

「どしたミツバ？ 腹でも痛いか？」

「・・・・・・・・ちがう・・・・」

俺に手を取られながらも、水を切る子犬のよつに首を振る。

「どうしたのミツバ？ 具合悪いの？」

並んでいた一葉も急におかしくなつた三葉に心配そつた眼差しを送る。

「・・・・・・・・なんでもない・・・・・・・・」

もつ一度俯いたままふるふると首を振つて答えた後、今度は自分から歩き出した。しばらくずっと、前だけを見て。

「」ここにまでは

3限目の休み時間。例の「」とく机に突っ伏そと教科書共々机の下へ詰め込んでいると、そつはさせるかと言わんばかりに花咲が俺の前の不在の席に腰かけてきた。

「どーも」

俺はさも不機嫌を顔に出して花咲を眇見<sup>すがめ</sup>る。

「あら、私じゃ不満？」

俺の顔を斜め下から覗き込むよつにして、悪戯な笑みを送つてくる。

「む・・・別に」

何か照れ臭くなつてぶつきりぱつに答えてやる。毎度毎度ペースを

崩されるのでかなり最近は苦手意識がある。あの件もあるしな。

「そう。あ、そういうえば面白い」と知ってるのよ

「面白いこと？」

さも今思い出したように言つ花咲。思わずオウム返しで返してしまつたが、これはまた罷だな。俺を動搖させて面白がるつもりなんだこいつは。最近わかつてきたぞ。

俺はすばやく臨戦体制を整える。といつても頬杖をついて興味のなさそうな顔を向けてやるだけだが。

「土曜日遊園地に行くとか

思わず顎が手の平から滑り落ちた。

「だからなんで俺のプライベートがモロバレしてんの！？」

「あら、私は一葉の話をしたのだけれど・・・」

ああ、一葉から聞いたのか。つてこれじや俺が行くこともわかつちやつたじやん！ 何この誘導尋問！ 花咲は刑事にでもなればいい！

「あなたも一緒に行くの？ ジャあデートなのね」

「ちがう。近所のアホガキと一葉の妹たちも一緒に。まあどっちかつて言えば俺達は保護者変わりのようなものなんだよ」

花咲は胸元に下がる巻き髪を電話線を弄るように指に絡めながら、「ふーん・・・」と一言呟いて、上目遣いで覗くように眼を合わせ

てくる。

「それで、まだ行く遊園地が決まってないらしいじゃない？」

「あ、ああ。この近辺じゃ同じくらいの距離で三つ遊園地があるからなあ」

「じゃあ、はいこれ」

そう言って、花咲が差し出してきたのは5枚の紙切れだ。

「なんだこれ？」

「ネズミーサルスタジアムジャポンの招待券。あげるわ」  
また、ピンポイントな枚数だな。そう突っ込みたかったが、どうせ無駄なのでそのまま飲み込んだ。

ネズミーサルスタジアムジャポン、通称NSJとはこの近辺、いや日本でも最大級に大きいアミューズメントパークで、大人から子供まで楽しめるアトラクション満載で大変評判がいい。土曜日の有力候補だったが、この近辺からだと一番遠く、少し迷っていたのだ。

「お、おいおい、いいのかよこんなの貰つちまつても・・・？」

「いいのよ、知り合いから貰つて使い道がなかつたから。五人用じやクラスメイトを誘うのにも中途半端だしね」

花咲はさらに招待券を俺の前に押し出してきていたので、俺は素直にそれを受け取った。

「サンキューな。この借りは何かで返すからよ」

「あら、楽しみにしてるわ」

妖艶に微笑んで、花咲は席を立つた。

午後の授業に起きた睡魔にも耐えて、ようやく待ちに待つた放課後だ。俺は久しぶりに筑紫と佐久間を引き連れて町のファミレスへと向かつた。最近は放課後になれば早々に一葉とスーパーに行くなん

てのが普通であり、朝の登校時も出発時間を早くしてしまったために、こいつらと顔を突き合わせる機会があまりなかった。しかし、昨日は事前に今日の分の買い出しも済ませておいたし、一葉と三葉については朝方一葉を雄太が学校へ送つていった後、メールで雄太がおばちゃんちで一緒に夕飯を食べてもらうことになつたなど吐かしていた。まあ一葉と少しでも仲良くなりたいがために半ば強引に誘いこんだのだろうが。三葉もいつも一葉と一緒に帰つてくるのでおばちゃんのところで厄介になるはずだ。なので、一葉も女子連中とどこへやら遊びについてしまつたらしいし、俺も久々にアホなこいつらとつむじとにした。

「こやあ～！　3人でこいつらと一緒にでだべるのいつぶりだ！？　あ、店員さん注文注文～！」

筑紫が黒縁メガネのレンズの奥でキラキラと眼を輝かせている。筑紫に呼ばれ、小走りで店員さんがやつてきた。

「えつと、ドリンクバー3つと、俺はこのジャイアントパフェで！　ハルっちゃんとサクマは？　なんか食う？」

「俺は大丈夫だ」

「俺もいらん。夕飯前でよくそんなもん腹にいれておけるな・・・メニューに書いてあるパフェは見ているだけで胃もたれしそうなほどに甘つたるい色を醸し出している。また量が大ジョッキほどに大きくえぐい。

「こんなもん俺の第2の胃に放り込んでおけばなんてことないぜ！　あ、じゃあ今言ったのだけ～」

お前は牛か。店員さんはメニューを今一度読み上げ確認してから、ペコリと一礼して掃けていった。

「よーし！　じゃあやるかあ、いつもの～！」

筑紫が景気よく右腕をあげる。

「またかよ・・・あれ飲めたもんじゃねえんだよなあ」

いつものとは、俺達がファミレスへ来ると決まって行われるジャン

ケンゲームだ。1抜けは王様気分、2抜けは3人分の飲み物を汲んでくる召使、そしてビリは死あるのみのタバスコ入りジュースの刑、要するに囚人の気分を味わうのだ。

「負けなればいいんだよハルキ！」

簡単に言つた簡単には佐久間は背中越しに神々しいオーラを出しながら微笑んでくる。このゲームをすると決まって佐久間は王様の座に君臨する。今だ負けなしの強運の持ち主だ。なんでこいつにだけは天は二物も三物も与えるんだろうなあおい。

「一九三九年九月廿一日、新嘉坡、

筑紫が氣張って立ち上かると、両手を裏にして合わせ、それをくるっと回してから自分の片目の前まで持ってきて、手と手の間から中を覗き込む。・・・まさかそれが秘策か？

むむ！ むむむむむむ！ ……見えた！！！」

「うわ、と向三を離したと思つて、その間は右脇を大きめに握りがる

スコモシヨシリ覗る。・・・トハカ美祭ニスコモシヨシ

「モーテルは見る……といふが実際はモーテルで声を張る筑紫を見て、俺も佐久間も仕方なくといった感じに手を用意。

「ほおおおおおおおんんんしゃああああああああー?ー?ー?」

筑紫バー。俺と佐久間はチヨキだ。

じ、ちゃん秘策は嘘だつたのかあああああ！

[2]

消え去る間際のラスボスみたいな断末魔を出して、筑紫は頭を抱えながらテーブルに平伏した。じいちゃんに教えてもらつたらしい秘策はものの数秒の戦いであつさりと敗れ去つた。つていうかパーだした時の手の平にちっちやくボールペンでパーつて書いてあつたような気がするが勿論言わないでおく。

筑紫が悶えている間に佐久間とも勝負をつける。まあ結果は言わずもがなだが。

「よし筑紫、どんな飲み物にタバスコを入れてほしい?」

王座についた佐久間様が腕を組みながら囚人筑紫に問うてやる。

「お、王の仰せの通り……に……」

今だ痙攣したようにテーブルに突つ伏している筑紫は、絶命直前の

兵士のように答える。

「よろしい。では召使、メロンソーダにタバスコだ」

「アーティスト」

「ラジヤーじゃない!? それ最悪ペアじやん!」

よつやく息を吹き返したよつに起き上がる筑紫。

「ああ、俺はコーヒー頼む。ホットで」

「リジヤー」

「ちょ、本気！？」あれ殺傷力激高だよ！？」

筑紫が王様に懇願していたがあえなく要望は取下げられ、筑紫はどう

うやうやバフロとタバスコ入りメロンソーダという最悪の組合を平ら

げねばならなくなつた。

卷之三

ようやくパフェも到着し、筑紫はパフェとタバスコメロンソーダを交互に口にしながらげつそりしている。

「聞こえてるペガ魚たぬひのせよへあるる」と

佐久間がハートボイルドにヒーリーを手に勝者の余裕を見せる

新編一編  
卷之三

「おひこさん」 二九二

と、思えば思ひ出したようにテープルに身を乗り出す。

「2人は誰狙いなわけ?」

## 「何の話だ？」

いきなり訳のわからないことを言い出す筑紫を、頬杖をつきながら眇る。

「惚けるなよー！ 今までの学校生活、なんだかんだ女つ氣のなかつた俺らだが！ 今回は上玉が3人もいるじゃんか！」

筑紫がやらしい雑魚のヤンキーみたいな言い回しでまたアホなことを言い出す。

「ま、サクマは一葉ちゃん狙いだるー？ いつや見ててもわかるもんな~」

「そそそそんなことなななないぞ！ おおお俺はただ仲良く学校生活をだなあ・・・」

急に頬を染め、物凄い勢いで動搖している佐久間。

「まあまあ、サクマについてはもうだいたいわかつてつからいいんだよ。問題はハルっちゃん、君だよ！」

佐久間は腹をさすりながらも立ち上がり、俺をびしっと指をじてぐる。

「なんで俺が・・・」

「ええい、はつきりしやがれ！ ハルっちゃんは一葉ちゃんと嘉穂ちゃんのどっちを狙っているのだ！？」

「一葉ならまだしもなんで花咲も入ってくるんだよー？」

「よく授業が終わると一人で内緒話してるじゃねえか！ と思えば帰りは一葉ちゃんと一緒に帰っちゃうし！」

もしかしてクラス内でもそう見えちまつてるってことか？

「まあ確かにそうだなあ。・・・碧原と花咲と、本当に何もないのか？」

佐久間も珍しく真剣な眼差しで俺に問い合わせる。・・・まあ当然だよな、好きな女の子が違う男といつも登下校してるっていうんだから。

「ああ。何もないよ本当に。登下校は家族ぐるみでの付き合いがあるからだし、花咲とはよく相談に乗つてもらつてるだけだ」少し佐久間に同情して、俺が気軽にそう言つてやると、佐久間はほつとしたように肩を緩めた。

「マジかよハルっちゃん。俺はてつきり一股かけてるのかと思つて

たぜ「

「俺にそんなプレイボーイ的甲斐性があるように見えるか？」

「見えないな」

二人で答えるでいい。結構ショックだぞ。

「ふーん、そうか・・・」

佐久間は安心したのか、残り少なくなったコーヒーを一気に飲み干す。

そして、

「じゃあ碧原のこと、本気になつていいんだな？」

何かを決心したような鋭い視線で、俺に向かつてそう言い放つた。しばし時が止まったように感じる。周りの騒がしい喧騒も耳には入らない。ちらりと田線を動かすと、筑紫も面食らった表情で佐久間を見ている。

俺も驚いた。普段からあまり感情を表に出さない、少し何考えているのかわからないやつだったから、この宣言には驚きを隠せない。

「・・・・・・」

答えようと口を開く。しかし何かが喉でつつかえたように声が出ない。喉が渇いているのか。俺は自分で注いできたコーラをストローで吸い上げる。炭酸が上手く刺激になった。

「　　あ、ああ。いいんじゃないか！？　そうそう実は俺も気付いてたんだよ！　佐久間は一葉に氣があるってさ！..」

俺は声高々に言い放つた。その瞬間、俺に向けてくれた一葉の笑顔が頭に浮かんだ。どくんと一つ心臓が跳ねる。

「そ、そうなのか！？　なぜだ！？」

「お前意外と顔に出てるんだよ！　だつてほら、アホな筑紫にもばれてるくらいだしよー！」

「アホいうな！？」

喋れば喋るほど、一葉の表情が浮かんでは消える。言葉と一緒に吐き出してくるように。

「おおおー…恥ずかしいぞー！」

佐久間は両手で顔を覆い、真っ赤になつた顔を隠そうとしているが、隠しきれていない。

「が、頑張れよー佐久間！ 応援してつからさー！」

一葉は家族だ。そんな感情はない。ない筈だ。一緒に住んでいるんだ。そんな感情持つてはならない。

そうか、驚きなんかじやないのか。隠せてないのは動搖だ。いつか佐久間が一葉を連れていってしまうんじやないかつて。

4月に俺は一葉に家について欲しいと言った。一葉も残りたいと言つてくれた。

でも、一葉自身がそう決めるなら、俺は背中を押すしかないのだ。家族とはきつとそういうことだから。そういうことなんだ。

「サクマの爆弾発言にはびっくりしたが、ちなみにおれは葵ちゃんだなあ！」

筑紫は腕を組み、うんうんと頷きながら、聞いてもいないことを口走る。

「枝村のビニが気に入ったんだ？」

「なんつうかさあー！ あの町で見つけた可愛い女の口！ みたいな無邪氣さがいいよねー！」

よくわからん例えだな。まあ筑紫と葵は性格的には似てるけど。

「そうかー。頑張れよー」

「ちよ、興味なさすぎじやない！？」

俺は大層無関心といった眠そうな表情を向けてやつた。

でも筑紫には悪いけど本当にこの時ばかりは無関心だったのだ。さつきの佐久間の言葉と、一葉の笑顔で頭がいっぱいだったから。

金曜日。

学校から帰つてくるなり、俺達は年末でもないのに大掃除を始めた。いや、大掃除というよりは改装工事と言つたほうが正しいだろうか。何故いきなりそんな事を始めなければならないのか。

それは

「日曜日のゲームバーにてだが、ヒトハたちにはあいつらと同様、客として来てもらひつ」

「お客?..」

一葉たちとの同居生活を隠すために、俺があまり思わしくない頭を懸命に捻り出して考えたアイディアはこうだ。

筑紫達同様に、一葉にも客としてきてもらひつ。その際、Weeの噂を聞き付けた一葉と三葉は無理を言つてお姉さんについて来てしまつたという設定だ。そうすれば自然な形で全員が俺の部屋に居られるという算段である。

そこで、現在の改装だ。すっかり碧原調になつた部屋を万が一にも見つからぬための措置を施す。幸い一葉達の部屋へは俺の部屋を通らなければ行けない。そこは襖ふすまで隔てられており、そこにタンスやら勉強机やらを移動すれば、裏の襖はただの押し入れにしか見えないというわけだ。

ついでに、俺の部屋へも入れないようにするためにテレビやタンスを俺の部屋への入口である襖の前に移動してやる。これで以前この部屋を訪れたことのある筑紫や佐久間がこの部屋について言及しても、使用していないの一言で済むわけだ。

「よお~し、これで一安心だな! 部屋に入るのにちょっと狭いけど

最後のテレビを運び終えて、大きく息を吐き出しながら置に腰を降

ろす。

流石にタンスなどは一人じゃ厳しい。老人でもないのに腰が断末魔をあげている。

「今お茶入れるね」

一葉が作業終了と見るや、甲斐甲斐しくキッチンへ動き出す。一葉たちには家具の移動を手伝わせてはいない。流石に一人じゃ無理なんて言つたらダサすぎるからな。

「土曜日はゆーえんち！　田曜日はゲーム！　たのしみだな～！」  
二葉が座布団に正座で座り、テーブルに両手で頬杖をつきながら、楽しみみなイベントに想いを寄せている。夕方のアニメのオープニングテーマを決して音程が合つてになるとは言えない声で気分よく口づさんでいる。

そして三葉は・・・、

「・・・あれ、何探してるんだ？」

何やらランドセルの中身を全て出して店を開いている。そして困った表情でノートや教科書の一つ一つを拾いながらをばをばせと振つていた。

「・・・・ない・・・・宿題のプリント・・・・」

「学校に忘れたのか？」

「クリと一つ頷いて、落ち込んだ風に瞳を伏せる。

備え付けの時計に目をやると、現在4時半。学校が閉まつていなければまだ間に合う時間帯だ。

「ミヅバ、俺が自転車におまえ乗せて取りに行くか？」

俺がそう提案してやると、三葉は笑顔という花を咲かせる。そして

今度は2回縦に大きく首を振つた。

「よつしや、じゃあひとつ走りするかー！」

止めてある自転車の荷台に三葉を乗せて、俺もサドルに跨がる。それと同時に三葉は短い腕を俺の腰に回してくれる。

「しつかり捕まつてろよー！」

俺は自転車のストッパーを思い切りよく蹴つて、自転車を走らせ始める。久々の仕事でマイチヤリも柔軟体操をする老人のようにギシギシと音を鳴らす。

「・・・・・ふわ・・・・」

そろそろスピードも出てきて、髪の毛が風に煽られる。後ろの三葉から驚きのような感嘆のよくな声も聞こえてくる。そろそろ下り坂に差し掛かる。ここからはペダルを漕がずとも一気に駆け降りる。坂道にならつて体重が前にかかり始めると、三葉の腰に回す手は一層力が増す。

「ミツバいくぞー！」

「わあ！」

徐々にスピードがついてきて、周りの木々が残像で版画のような刷つた絵のように見える。俺はこの景色が大好きなのだ。そして緑の匂いを感じながら風を切る様は、さながら森にできた自然のジェットコースターだ。ものの10秒程の短い距離ではあるが、この瞬間だけは全てのことを忘れさせてくれる。

勢いよく坂道と森林を駆け抜けて、俺は一度丁字路で自転車を止めた。流石にここは猛スピードでは曲がれないからな。

「わあ、すじかつたあ・・・」

三葉が後ろで大きく息を一つ吐いて、嬉しそうな顔を覗かせる。

「すごいだろ？ 歩くのとはまた違つた感動があるんだ」

普段あまり見ることのできない、三葉の満面の笑みがそこにあつた。それだけで自転車に乗せてあげた甲斐があつたというのだ。

俺は三葉の笑顔を引き出した嬉しさに浸りながら、再びペダルに足を乗せた。

「ここからは、普段ならば右に曲がる。高校があり、ショッピングモールや南田、住宅街などと栄えている駅前の方だ。しかし今回は左にハンドルを切る。花岡小学校は、さらに郊外の方へと向かう。ものはや畠やたんぼ、そして農家のぽつぽつとした一軒家ぐらいしか見れなくなる。最近ではようやく駅前が栄えてきたが、まだまだこの辺りは田舎だ。ただ、自然が変わらず残り続けている点は、変化を嫌う俺にとっては喜ばしいことである。長く育ってきた場所が変わつていく様はあまり見たくはない。」

そんなことを考えながら、長閑なたんぼと畠の間を少し自転車を走らせて、俺と三葉は花岡小学校へと降り立った。どうやらまだ閉まつてないようだ。

「懐かしいなあ～」

幼少の頃の郷愁が胸を躍る。すぐに学校の全景が記憶から呼び起される。校門を抜けてすぐに校庭にでる。そこには、かなり大きなジャングルジム、シーソーや滑り台、鉄棒にブランコなどなど、小学生には必須アイテムである懐かしい遊具があの頃と変わらない様でそこにあつた。

次に校舎を見る。

「・・・あれ？」

木造建築の校舎全体には、マス目のように組まれた鉄パイプに、工事中のシートが取り付けられていた。

「・・・・・改築工事、するんだって・・・夏に・・・・」

「そう・・・・なのかな・・・・」

きっと都会的な校舎に様変わりしていくのだろう。コンクリ仕様か、ガラス張りか。でも、生徒が綺麗で落ち着いて勉強できる環境ができるのはいいことだ。前はゴキブリだらけだし、黒板やらロッカーやらボロボロでてんやわんやだったからな。

でも、変わっていくんだ。そのうちこの辺りの森林や畠も住宅街になつてしまふのだろうか。

「・・・ミヅバ、学校楽しいか？」

気を取り直して俺がそう問うと、三葉はすぐに俯いてしまった。

「友達……あんまいないのか？」

俺が再びそう問うと、三葉はアヒルのよつて口を尖らせて、コクリと一つ頷いた。

「……なんて……話かけばいいか、わからなくて……」

薄れるような声で悲痛な想いを吐露する三葉。手を胸の前でぎゅっと握り、辛い想いを押し潰している。そういえば、前に一葉が三葉も人見知りだつて言つてたつけ。

話題選択に自爆した俺は、なんて声をかけていいかわからず、頬をかきながら意味もなく視線をさ迷わせる。

一つ大きな風が、俺達の髪を靡かせた。

すると、砂場のほうで遊んでいる一人の少年を俺の目が捉えた。滑り台のすぐ下だ。さつき見た時は気づかなかつたのだろうか。

「よし、ミツバ。あそこで遊んでる男の子に声かけてみよう！ ちよつとじ同じ年くらいだろ」

「…………え？」

俺がそう提案してやると、三葉も俺が指す方を見てすぐに田を逸らした。

「大丈夫だつて！ いつも一葉と話してるように、寄つて行けばいいのさ」

「…………で、でも…………」

俺はぐいぐいと背中を押して、少年の元へと運んでやる。

「ほら、さつき坂道で俺に見せてくれたばつちり笑顔で手振つてみ？」

上目遣いで半ば涙目な眼をこちらに向ける。少しばかり躊躇した後、仕方なくと言つた感じで少年の方に向き直り手を振つてみる。先程よりはぎこちないが、三葉は控えめな笑みを作つてゆっくり手を振つた。

そんな様子に少年は気付いたようで、そちらもにこりと笑みをくれ、

手を振り返してきた。

「よし、寄つていってみようぜ」

「うん・・・

俺達はその少年がいる滑り台の下の砂場へと寄つて行く。遊んでいるわけではなく、ただレンガで仕切られた砂場の中央でしゃがんでいるだけだ。

「ほら三葉、あこやつ」

俺の後ろで顔だけ覗かせて三葉に促すと、怖ず怖ずと前に出てきて、

「・・・・・・」、こんなには・・・

とだけ言つた。もつ夕方だしこんばんはだとは思ひうが、今はそんな事は問題ではない。三葉が多くない勇気を振り絞つてゐるんだから。

「ここにちは

少年は立ち上がり、まだ声変わりの済まされていない子供らしい声でお行儀よくぺこりと頭を下げる。

彼は、茶色いキャスケットを被り、同じく茶色いパークー、下はジーパンを履いてゐる。襟足やサイドから見える黒髪は艶やかであり、目鼻立ちの整つた可愛らしい少年だ。彼が頭をあげると同時に、撫でるような風が俺達を撫つた。

「ミヅバ。自己紹介してみ？」

後押しするように背中に触れてやる。一瞬びくつと身体を震わせて、三葉は意を決したよつと一步前に出る。

「・・・・・あ、あの・・・・・・畠原・・・・三葉です。・・・4年2組・・・です」

今にも顔から火が出そうなくらいに顔を真つ赤にしている三葉。こりや重度の人見知りだな。といつても一葉も確かにこんな感じだったけど。

その様子を見ていた少年は驚いたような顔を向け、立ちぬくしてい

る。かと思えばこつこつと静かに微笑んで、

「風間希望です。のぞむは漢字で『希望』って書きます。えつと・・・

・僕も4年生です」と返してくれた。

その言葉に安心したのか、三葉はよがりかく俯いていた顔を上げて、少年の顔を眺めた。

「三葉ちゃん……って呼んでもいい?」

「……う、うん」

「僕の事も、のぞむって呼んでね」

「……う、うん」

何やら微笑ましい様子に笑みが零れずにはいられない。ちゃんと友達できたじゃないか三葉。

「……おんなじ4年生だけど、クラスにいない……よね……」

「…？」

「別クラスか」

確かこの小学校は2クラスしかない。ところが三葉は2組だから彼は1組だろ?。

「三葉ちゃん、僕いつも休み時間は砂場で遊んでるから、遊びにきてね」

希望くんは口角だけあげて、三葉に笑いかける。三葉は「クリ」と嬉しそうに頷いて、すぐに向き直つて俺に笑顔をくれた。

「良かつたなミツバ」

俺が三葉の頭を撫でてやると、擦つたそつに眼を細めた。

「……そうだ……ハルキ、プリントとつてくるね」

「おう、そうだった。ここで待つてるよ」

踵を返して、三葉は決して速くない足を学校に向けて行つた。それはさながらスキップのように跳ねるステップで。

「三葉ちゃんの……お兄さんですか?」

三葉を眼で見送つていると、後ろから丁寧な声がかかる。

「ん~、まあそんなとこだ。俺は春樹っていうんだ」

「春樹さんですか。……ありがとうございます」

希望くんは再び深く一礼する。大変しっかりした少年である。俺が

4年生の時なんか鼻垂れたクソガキだったぞ。

「そんな畏まらないでいいよ。こっちがお礼をいいたいくらいだ。いきなり話かけてごめんな。そして、三葉と友達になつてくれてありがとう」「うう

真摯に俺が言つと、希望くんは「いえいえ！」と慌てたように両手を胸の前で振る。そして、少し落ち込んだように視線を落として、

「僕、友達いないんです。みんな僕のことなんて無視するし・・・」

そう呟いた。

意外だな。礼儀正しいし愛想も良くて、氣立ての優しい少年であるように見えるのに。希望くんは続ける。

「だから、手を振つてもらえて、声をかけてもらえた時はすげーく、すごくうれしかったんです！」

先程まで振っていた手は次第に胸の前で小さなグーの手に変わり、嬉しさを表すポーズへと変わる。

「そつか。あいつも人見知り激しくて、あんまり友達がいないから、良ければ仲良くしてあげてくれ

「はい、こちらこそ喜んで！」

閑静な笑顔で言つて、またまた深々とお辞儀をした。

「ああ、そうだ。ミツバはちょっとからかつてあげるくらいが丁度いいと思つぞ」

「そなんですか？」

「おう。怒りだすと可愛いんだあいつは」

俺は笑いを堪えるように喉を鳴らす。

「怒つているのに可愛い・・・」

希望くんは頸に指で触れながらふむふむと頷いている。

「あはは。ありがとうございます。春樹さん

「こちらこそ。お、帰ってきた」

足音に反射して振り向くと、ことことカルガモの子のよつな拙い足取りで三葉がこちらにやつてくる。手には一枚の紙を大事そうに胸の前で持つている。どうやら見つかったようだ。

「・・・ハルキ、あつた」

「おう、よかつた。んじや帰るか」

俺がそう言つと、三葉はコクリと一つ頷いて、プリントを持つてい  
ない方の手で俺の手を握る。

「じゃあ希望くん。俺達は帰るけど、君は?」

途中まで一緒に帰れるのではと考へて聞いてみるが、

「いえ、僕はまだ少しここにいます」

と言つてまた砂場に座り込んだ。もうカラスも帰宅の途につくころ  
なのに。三葉は少し残念そうに瞳を伏せている。

「そつか

「はい。三葉ちゃん、」

「・・・は、はい!」

急に会話の矛先が自分に向けられて驚く三葉。

「またね」

少し間を置いてから優しく手を振り、満面の笑みで希望くんはそ  
う言つた。三葉はまた大きな光を宿したように表情が明るくなつて、  
先程坂道で見せた笑顔で手を振り返していった。

その夜。

いつもなら寝ぼけて俺の布団に入つてくる三葉は、最初から一緒に  
寝たいと言い出した。三葉は頬をお餅のように膨らませて、気に入  
らない様子だったが、一葉が一緒に寝てあげてと言つので断るわけ  
にはいかなかつたが。まあ最初から断る気もないが。

「んじや、電気消すぞー」

「・・・うん」

天井から垂れ下がる線を1回2回と下に降ろして、部屋内を暗闇に

七八〇

布団から出ていた腕を仕舞つて、右隣の三葉を気にしながら仰向ける。)

明日は遊園地か。遊園地なんて一体いつ以来だろうか。5人とかよくよく考えてみれば遊園地に行くにはかなり微妙な人数だよな。雄太が無駄なんだ雄太が。

などと後頭部で手を組むが、  
ツがか弱い力で引っ張られた。

顔だけ横の三葉に向けると、三葉はすでに身体」と俺の方へ向いていた。

「俺が照れ隠しにそう言つと、三葉はまつとしたような表情をしてから、俺に背を向けてしまつ。」

「ミツバ?」

「・・・・・なんでもない」

すんすんと鼻を啜る音と、その音とともに肩が反射しているのを見ると、すぐにわかつてしまつ。俺はあえて何も言わなかつた。三葉が何故泣いているのか。本当の所はわからない。ただ、三葉はまだまだ子供なのだ。俺が簡単に触れてもいいことじゃないのはわかつてゐるが、彼女達の両親は一体何をしているんだろう。一抹の苛立ちが俺の胸を侵食する。こゝなにも健氣で純心な彼女達を置いて・・

俺は考へるのをやめた。

思い出したくもないことを思い出しそひで、苛立ちはぱークに達しそうだつたから。

せつかく三葉が可愛いプレゼントてくれたのに。

「おしミツバ、明日は待ちに待つた遊園地だぞ」

「・・・・うん」

今だ嗚咽を漏らしていた三葉だが、返事だけはしてくれた。

「何乗りたい？ あそこには面白そなアトラクションがたくさんあるんだ」

三葉は思案していふのか、少し間を置いてから再びじりりへ向き直る。

「・・・・・観覧車」

少し晴れ上がつた日に光を宿し、俺のシャツの袖を掴む。

「観覧車かあ。誰と乗りたい？」

また少し間を置くよつて、三葉も仰向けへと体制を変える。

「・・・ヒトハと、フタバと、ハルキと・・・4人で・・・」

「はは、それじゃあ雄太には下で寂しく待つてもらうつか」

「・・・・・そう・・・する」

そう言つたきり、三葉から声を聞くことはなかつた。替わりに聞こえてくるのは、安心しきつたように眠る三葉の寝息だけ。暗闇の中で、俺は田を細めて三葉の表情を見る。そして三葉の規則的な寝息を予守隠に、俺もいつの間にか夢の世界へと誘われていた。

### 第3章（1）

来たる土曜日。天気は梅雨の嫌な空氣を吹き飛ばすほどの中晴。といつてもまだ辺りは明るいとは言えない。

それもそのはず腕時計を確認すると現在6時半。俺、一葉、二葉、三葉、雄太の5人は眠い眼を懸命に開きながら、花岡駅のホームで電車を待っていた。

「う～眠いよ～・・・」

二葉がホームのベンチで「じ」と眼を擦つて顔をしかめている。三葉は隣で俺の手を握りながら、舟を漕いでいる。一葉も二葉の隣で催眠術にかかるような表情で遠くの方を見ている。

何故こんな時間に駅にいるのかというと、朝の5時にピンポン連打で起こされて、誰だやかましいと戸を開けてみれば、またも雄太は薔薇を啞えながら、

「一葉さん、白馬の王子が遊園地へお連れしましょう」などとニキビ面に似合わなすぎる台詞を吐きやがった。

馬がどこにあるんだ馬が。

安眠を遮られたことと、朝から不快な物を見せられたことでぶん殴つてやろうかと思つたほどだ。

今日俺達が行くネズミーサルスタジアムジャポン『NSJ』は花岡駅から電車一本で1時間ほど。調べたところ、開園時間は9時半からなので、今から行つても2時間ほどエントランスの前で待たされるのは確実だ。

「おい雄太、こんな早く行つても開いてないだろ」

俺は侮蔑の視線をくれてやると、雄太は眉を上げて外人のように肩を竦める。腹立つなその顔。

「ハル兄、わかっていないね～」

「なにが？」

「ＺＳＪだよ？　早い時間からエントランスで並んで、早々に人気アトラクションに乗る！　これは常識でしょ！」

一体どこの常識なんだ。まあどうせ行くなら全てのアトラクションに乗りたいけど。

「つてハル兄と話してる場合じゃないんだよ！　一葉さん！！」相変わらず忙しない雄太は、眼をこしごしホームのベンチに腰掛けている一葉の元へと飛んでいった。おばちゃんの子供とは到底思えない行動力だな。

4人を順に見ていく。

一葉の服装は、細かい構造の薄茶のワンピースに膝下のスカート部分が白で二重構造になっている感じのもの。頭には斜めにちょこっと乗せた白いふわふわの帽子飾りが栗色の髪によく映える。全体的に見てふわふわな印象の彼女は、童話に出てくるヒロインのようだ。一葉は、黒の可愛いいらしいプリントシャツに赤いチェックのシャツを羽織っている。下はデニムショートパンツに黒タイツで、全体的にカジュアルな印象。

三葉は身体のラインが見える薄いピンクのシャツ、膝くらいの青いスカートに、腰に巻いた太めの茶色いベルトが特徴的なガーリー系ファッショն。

ちなみにあまり描写したくはないが、雄太は黒のシャツに赤のネルシャツ、下ジーンズ。

俺は黒のパーカーに同じくジーンズとかなり軽い印象の服装だ。この三姉妹の前にはどんなに着飾ろうと敵いやしないので、もう開き直つてハナオカで安売りしてた売れ残り商品での「オープニング」だ。笑いたきや笑え。

そんなことを考えていると、鼻声なアナウンスの後に電車が滑り込んでくる。始発近くの駅のため、まだまだ電車内は空いている。一葉たちをボックス席に座らせて、俺と雄太はその前で立つことにした。

一葉たちも夢の国への体力を温存するべく寝入ってしまい、俺と雄

太も壁にもたれ掛かりながらうとうとしていた。たまに腕時計を確認していたが、30分も経つ頃になると、電車内は何やら通勤・通学ラッシュのか混雑してきた。でも今日は土曜日だぞ……？よく辺りを見回すと、中高生や家族連れが多い。聞こえてくる会話の内容は何乗るとかあのパレードがどうとか……。

「・・・ま、まさかな」

そのままかだつた。

電車は駅に停止することに続々と人を補充していく。  
車内は騒がしくなつていたことで一葉達も眼を覚ました。

「わっ！ なにこれ！？」

ぎゅうぎゅう詰めで立つのも困難になつてゐる俺と雄太を見て、一葉が眼を剥く。

「ど、どうやらこれ全部ノシッに行くっぽいぞ・・・ついててて！」

壁に寄り掛かつてゐたために人の圧力がもろに伝わつてくる。

「ハル兄、あと2駅だよ！ もつちょいだ！ 勝利は目前だよ！」

「なんの勝利だなんの！ つてうおおお、また人が入つてくる！」

二葉はいの一葉に鉄橋を踏み締めて、両手を天に挙げながら感慨に浸つてゐる。  
「つ、疲れ果てた……」  
ネズミーサルスタジアムジャポン前駅という駅に降り立ち、改札を出ると誘うような軽快な音楽が聞こえてくる。パークへのエントランスに続く鮮やかな色で彩られた鉄橋を歩いて行けば、そこには夢の世界への入口だ。

二葉はいの一葉に鉄橋を踏み締めて、両手を天に挙げながら感慨に浸つてゐる。  
「つ、疲れ果てた……」  
ウォーミングアップのし過ぎのように、俺と雄太は膝に手をつけgeんなり。本番前から疲れ果ててしまつた。

ちなみに先程まで乗つっていた莫大な数の人々はほとんどどこで降り立つた。それでも駅も通路も広いため、身体が触れるほど混雑ではない。

「うおおお！　はやくいこーダッシュでいこー！」

ぶんぶんと手を振りながら今にも盗んだバイクで走り出しそうな表情を向ける一葉。

「一人ともはやくー！」

一葉も次いでいつもよりも遙かに高いテンションで一葉にあやかり手を振る。声を出さないまでも三葉も大きく手を振つて、楽しさを身体いっぱいで表している。

遠くに見えるパークの背の高い西洋風の建物をバックに溢れんばかりの笑顔を振り撒いている三姉妹は、遊園地の着ぐるみでもないのに周りの視線を独り占めだ。

「ハル兄・・・いつもこんな風景見てるの・・・？」

先程まで満員電車でぐつたりしていた雄太も、神秘的な絵に口をあんぐり開けて見とれている。

「汚れるからあまり見るなよ」

「ナチュラルにひどいよハル兄！？」

大袈裟に突っ込んでくる雄太は無視して俺は一葉たちのもとへと駆けていった。

「おおおなんだこれ！？」

鉄橋を越えると、日本にいるとは思えない景観と色とりどりの花たちが俺達を迎えてくれた。しかし驚いたのはそこではない。エントランス付近の広場では、既に入場待ちの人々でごつた返しになつていたのだ。

入場口には既に前売券などを持つている組の行列があるし、チケットを販売する窓口にも大多数の人々が、あまり定まっていない列を作つて、窓口が開くのを心待ちにしている。

「・・・」、これってまだ開園2時間前だよね・・・？

一葉があまりの人の多さに目をして呆然としている。入場口に

列ぶ先頭付近に目をやれば、キャンプ用の小さい折り畳みの椅子に座りながら待っている人、レジャーシートを敷いてまるでピクニック気分で待っている人など、ちょっとプロフェッショナルなグループも存在していた。きっと各自どうしても乗つておきたいアトラクションがあるのだろう。もはや俺達とは気合いが違う。

「し、しょうがないから列<sup>なら</sup>ぶつきやないな・・・」

もう最初から溜息しか出ない。夢の国への道のりはなかなかに険しいようだ。

「あれ、列動き出した?」

もうそろそろ足が急くなってきたという頃、列は思い出したように前に進み出す。ここから見える噴水の中央に伸びる時計を確認するど、どうやら開園時間を過ぎたらしい。

「おおお、ついにか!」

「待ったね~」

一葉と二葉が嬉々と安堵が入り混じつたように笑いあう。

「・・・って、なんか走つてねえ?」

前の様子が気になつて覗き込むと、数人の制服を着た女子高生グループが、入場口のお姉さんの元気ないつてらつしゃいを合図にするように、切られたチケットを貰つと同時に猛然とダッシュをしていった。

「ハル兄、あのが例の真っ先に乗りたいアトラクションに向かう戦いの合図なんだよ」

雄太が屈伸運動をしながらやかましい横顔を向ける。夢の国で戦いとか言うんぢやないよ、物騒な。

「へえ、みんな必死なんだな~」

「ハル兄! なにのんきに人事みたいにいつてんの!」

「は？」

雄太は鬱陶しく眼を見開く。そして靴紐をきつく結んで、  
「俺達も行くしかないっしょ、頂いただきにさ」

と意味のわからない事を吐かし、不揃いな歯を見せつけグッズサイ  
ンを向けた。

・・・おー、そろそろ俺達も入場かー。

「一葉さん、是が否でもお乗りになりたいアトラクションはなんで  
すか？」

「へ？ んつとんつとー、ジェットコースター！ あのCMでやつ  
てるやつ！」

俺達の先頭に並んでいた雄太は係員のお姉さんにチケットを渡す。  
「なるほど、スプラッシュシャーバレーですか。流石一葉さん、お目が  
高い。かしこまりました」

雄太のチケットが切られ、係員の人気がその切られたチケットを返す。  
「では、いつてらっしゃーい！」

元気な係員の挨拶を合図に、陸上のクラウチングスタートをかまし  
て全速力で走り去つて行つた。ドップラーで「一葉さん！」と残  
して。

「・・・・・・・あ、チケットお願ひしまーす」

俺は他人の振りを決め込むことにして、平静を装つて残り4人分の  
チケットを渡す。流石に一葉達も後ろで苦笑していた。

間もなくチケットがまとめて切られて、係員の「いつてらっしゃい  
ー！」で走り出す事もなく、俺達はゆっくりとゲートを潜つた。

「・・・・・・・わあ！」

三葉の感嘆の声が聞こえる。

足を踏み入れたその場所は、四方八方に広がるメルヘンチックな外  
観と音楽。ここだけ虹色で描かれた絵のように綺麗な風景。まるで  
別世界に迷い込んでしまったような錯覚。妖精が居ても不思議では  
ない華やかなその情景は、全ての人々の心にタップダンスを踊らせ  
る。

エントランス付近にあつた広場をむろに大きくしたような、心安らぐ場所に俺達は誘われた。

「きやああああ！　すごいすごい！　！」

一葉のテンションも最高潮に達し、身体を動かさずにはいられない。

「おおおおお！　すげーきれい！　なんだこゝはー！？」

一葉も眼に星を流して満面の笑みだ。

「あそこ見てハルキ！　なんかいるよー！」

「おお、あれは・・・」

一葉が指す先には人の壁に囲まれた着ぐるみの姿。

「ネズミーサルのマスクットキャラクターのウツキーだな」  
そいつは人だからの中心でコミカルなダンスを交えながら、握手や写真に応じている。

外見は明らかに猿だが、身体の色は黒色。赤いオーバーオールを着て、足には大きい茶色い靴。高い声で「はははー」とよく笑う。その癖このキャラクターはネズミですとSMでもで書くほどの強引さ。これが猿じゃなかつたらネズミに失礼である。

「・・・・・かわいい・・・」

三葉がふやっと頬を緩ませる。女性には大人気であるというウツキーは三葉の眼にも可愛く映るようだ。俺としては三葉の方がよほどマスクットに相応しいと思うのだが。

「ねね！　みんなで写真撮つて貰おうよ！」

「おおお写真！　とろいとろいー！」

「ちょっと混んでるけど記念にはもってこいだな」

4人で顔を見合わせて、俺達はまずウツキーと写真を撮ることにした。カメラは先程駅でインスタントカメラを買つてきた。

5分ほど他の人達のピースサインを眺めてから、程なくして俺達の番が回つてくる。

「よ、よろしくおねがいします・・・」

何故だかウツキーに深々とお辞儀している一葉。そんなところでも

人見知りするのか。そんな一葉にウツキーもぎびきびした動きでお辞儀仕返している。

俺は撮影係を担っているスタッフのお姉さんにインスタントカメラを渡し、俺もウツキーの元へと近寄る。

「…………お、おお結構でけえな……」

意外に高身長なウツキーは俺達4人を上から覆うように肩を組んで、満面の笑みのまま表情の変わらない顔をこちらに向ける。な、なんか顔が変わらないから近くで見ると不気味だな……。夢に出てきたようだ……。

俺の左肩にウツキーの左手、一葉の右肩にウツキーの右手。その真ん中に一葉と二葉という図で撮影を開始する。

「はいはーい！ 笑つて笑つてー！」

スタッフのお姉さんの甲高い声が響く。お姉さんが片手で手を振りながら満面の笑みで俺達の笑顔を引き出そうとする。それにつられてるように俺達も顔の筋肉を緩ませる。テレビとかでもよく見るけど、遊園地のスタッフさんは笑顔を引き出すのが上手すぎるだろ。普段無愛想の俺でも穏やかになる。

「はあーい、チーズ！！！」

パシャッという軽い音とともにまばゆい光が眼に焼き付く。そしてお前たちは用済みだと言わんばかりにウツキーは大袈裟に手を振る。俺もお姉さんからカメラを受け取り、後ろが詰まってるから早く行つちまえ的な「いつてらっしゃーい」をもらつて、俺達は早々にウツキーの輪から追い出された。

「遊園地つて結構忙<sup>せわ</sup>しないな」

「そうだねー。……でも、4人で初めての[写真だよねこれって・・・

ちらりと窺うように俺を見る一葉。

「えへへ、嬉しいなあ」

「俺も現像が楽しみだよ」

「うん！」

広場の花たちにも負けないほど笑顔を咲かせて、頬を染める一葉。一葉達はきっと満面の笑みで写つてゐるだらう。じゃあ果たして無愛想な俺はどうだらう。写真はどちらかと言えば苦手な方だ。それでも俺は、今回だけは自信があった。スタッフのお姉さんの効力じゃない。ただ純粋に、心からの笑顔で写つてゐるはずだと。

エントランス広場を通り、ギフトショップが建ち並ぶストリートへと足を運ぶ。ヨーロッパのような信号機や停車してあるレトロな自動車がかなり雰囲気を醸し出している。この辺りに来ると、メイクや変装をしてキャラクターになりきっている人が多くなってきた。もはや日本にいるとは思えなくなってきた。そんな中、ほのかに香りだすメルヘンチックな甘い臭いを感じながら、俺達はのんびりとストリートのコンクリートを歩く。まだ開園して30分も経っていないというのにお土産コーナーは大混雑だ。そしてどれも田代りしそうな可愛いショップに、やはり一葉たちの眼はその都度さ迷う。「みてみて！ ウッキーの耳！」

売り物であるウッキーの耳を模ったカチューシャを付けて、一葉が笑いかけてくる。

「おお・・・可愛いな」  
「でしょ～！」

俺としてはあまり可愛いとは思えないウッキーのパーツだが、一葉が身につければ何でも可愛い。もうさつきから歩く度にこの三姉妹は注目されているしな。擦れ違う人は必ず振り返るし、その後俺を見て、「なんだあの馬の骨は」みたいな眼を向けられる。くそ、やつぱり俺もビシッと決めてくれば良かつたかな。

「ひとつと

そんなことを考えていると、俺のパークーの裾が引っ張られる。

「……………ハルキこれ…………」

渡されたのはフリーパスチケットを入れておける首から下げるキャラクターストラップ。下からチワワのような瞳で訴えてくるのは二葉だ。

「…………皆で付けるか？」

「うんつける！…………あ…………つけたい…………かも」  
ぱあっと笑みを零して、すぐに恥ずかしくなったのか咳き声になってしまふ。最近三葉の言わんとしている事がわかつてきてちょっと優越感だ。たまに少し素が出てしまふ所も可愛い。って俺二葉好きすぎだろ。

それぞれ好きなキャラクターを選んでから、俺はレジへと向かった。  
「つてレジも混んでる…………」

これまた会計に5分以上掛かりそうだ。

仕方ないので折角だから誰が何を買つたか見てみよう。

一葉は好きなキャラクターなのだろうか、ウツキーが片手を挙げて  
につこり正面で笑っている様が描かれているストラップ+ウツキー  
の耳。

二葉は口ナウドドッグとかいうやかましい鳴き声しか出さない青い  
水兵さんみたいな服を着た白い犬が大口開けている絵が描かれてい  
るストラップ+ウツキーの彼女のウキーちゃんのリボン。

三葉はブタのブーさんという橙色の毛並みに赤いシャツ、そして大きく腹が出ていて、毎日ハチミツが食べたいらしいキャラクターの  
ハチミツを素手で掬っている様が描かれたストラップ+同じくブー  
さんの耳。

俺はチップポとドールという茶色いちつこいハムスターの兄弟が二葉  
と三葉のように小突き合いをしている様子が描かれたストラップ。  
俺は流石に耳は付けれない。

よつやく会計を終えて、一葉達はそれぞれ思い思いのキャラクターへと変身する。

「どうかなこれ！？」

耳やらリボンやらを装着した3人はそれはそれは爆発的な可愛さだつた。

「・・・か、可愛いと思つぞ・・・」

「へへ～ほんとかー！」

くつそ今ほど口下手な自分を呪いたくなる瞬間はない。

そんな俺の言葉でも、一葉はウツキーの耳に触れながらはにかみ、二葉はぴょんぴょんと跳びはね、三葉は頬を染めて微笑していた。

「ハルキも耳買えば良かつたのに～」

「俺が付けたらすれ違ひ毎に引かれるぞ」

その言葉に一葉はしばし下唇に人差し指を当ててから、

「似合ひうと思うけどな～・・・」

そんな事を呟いていた。どこ見てそう思つたんですかね。

「おっしゃ～ んじやそろそろアトラクション行くか！」

「お～！ どれ乗るどれ乗る！？」

「全部乗りたいもんね～。やっぱり近場から？」

「・・・・・・・・・ブーさんは絶対・・・」

エントランスで貰った地図を広げて、アトラクション一覧を眺める。

「えっと、まずここから近いのはスペースゾーンだな」

ZSは7つのゾーンに分かれしており、それぞれの場所でアトラクションや外観、グッズや食べ物等が異なり、好みがかなり分かれる。他にウエスタンゾーン、トゥーンゾーン、ファンタジーゾーン、ウォーターポート、アドベンチャーゾーン、カントリーゾーンがある。「初めて来たんだし、とりあえずはそこに行つてみよっか！」

「そだな～。一葉と三葉もいいか？」

「お～！ この4人ならどこでもおけーだ～！」

三葉もひとつ頷いて、俺達はまずスペースゾーンに向かうことに決

め  
た。

### 第3章（2）

ギフトショップのストリートを抜けて少し歩くと、スペースゾーンに入る。先程の西洋風な様子とは打って変わって、未来的な外観へと変わる。どこからか流れてくるBGMも、神々しくかつ冒險的だ。きゅーいーんだとかちゅーおーんだとか今の時代では聞くことのできない擬音も聞こえてきて、まるで未来にタイムスリップしたかのように感じる。

「おおお～すげ～かつちょえ～！　トラえもんの世界だ～！」

どこを見ても感嘆の声しか出ない。一葉は、宇宙スター・ションのよくな建物を眺めながら眼を輝かせる。

「えつと～、ここでもひとつジユットコースターがあるみたいね」

「ああ、テレビでよくやつてる？」

「スペースコースターね」

一葉はガイドマップを広げながら解説する。

「・・・神秘的な宇宙の星々に囲まれながら、その中心をロケットのようない猛スピードで駆け抜けるジユットコースター、だつて！」

「猛スピードか！　はやいのかー？」

「そりゃ～もう」

「おおお！　乗りたい乗りたい！」

一葉は興奮でウキーちゃんのリボンを揺らす。

「んじゃそれ行くか？」

「ミツバは絶叫系大丈夫？」

一葉は二葉に眼を向けると、三葉は何やら固まっている。

「へへーミツバどうせ恐いんだろ～！」

「そ、そんなわけないだろ！　フタバカタレー！」

「あーー！　フタバにバカをくつつけるな～！　っていうかタレを

足すなー！」

こんな感じでもぽかぽかと小突き合ひが始まる。まあ二葉も一葉

の冷やかしで半ば強引にも乗る気になったようだし、止めても一葉がうるさいからと意地を張つて絶対に乗るだろうから止めないけど。そんなわけで、俺達は猛スピードの宇宙旅行へと赴くことになった。

「な、長かった・・・」

近代的な通路をゆつたりと歩き続けること一時間半。ようやくロースターの乗り場が見えてきた。

「これじゃあ、全部の乗り物は無理だね~」

「そだなあ、どうしても乗りたいやつに田星つけて列ぶしかなさそうだもんなあ」

あと2、3グループが乗れば、次は俺達の番だ。

「へへー！ 絶対に口ナウドの方が可愛いもんね～！」

「バカタレ！ ブーさんの方が可愛いに決まってるもん！」

「ぜつたい口ナウドだよっ！ つていうかすぐにバカバカいうなー！」

「ブーさんブーさんブーさんブーさんーーー！」

相変わらず俺と一葉の前では不毛な戦いが繰り広げられていた。前のカツブルも二人を見て可笑しそうに笑っている。まあ楽しそうで何よりだ。それにしても三葉、ハイテンションである。

「フタバ、ミツバ、もうそろそろだぞ～」

声で制してやると、二人は思い出したように手を止める。

「おおおー！ ついにか！」

俄然ハイテンションになる一葉を尻目に、三葉のテンションは右肩下がりになる。いや、普段のテンションに戻つただけなのだが、今回ばかりは本当にテンションがた落ちなのだろう。

「ミツバ大丈夫？」

一葉が震え始めた三葉の顔を覗き込む。三葉は一応頷くものの、視線はただただ床のリノリウムに落としている。徐々に番が近づくに連れて、俺のパークーの裾を握る力が強まる。

「もう次だけど、ペアどうする？」

そういうえば決めていなかつたと思い出して、俺は三人に問い合わせる。

「うーん……じゃあミツバは誰となら安心して乗れそう？」

一葉は肩に手を置き、優しく言つ。三葉は怯えながらも少し顔を挙げて三人の顔を見比べた後、一人を指差した。

「・・・俺か？」

三葉は「ククリとひとつ頷いて、俺のパークーを引っ張る力が更に強まつた。伸びちまつよ安物だから。

「じゃあ私は一葉と乗るね」

通路内で移動して、ペア同士で横に並ぶ。一葉と二葉は前に、俺と三葉はその後ろに。

「ようこそスペースコースターへ！！！」

元気なスタッフのお姉さんは俺達を乗り場へ迎え入れる。計8人乗りの口ケットを模したコースターで、俺達は3番目、4番目に乗り込むことになった。

「先頭じゃなくて残念っ」

一葉が肩を竦める。まあ三葉にどつては何処でも同じっぽいけどな。「では安全バーをゆっくりと降ろしてください！！！」

前の円いクッショーンを腹の前に降ろす。スタッフの人々がそれぞれ安全バーが安全にロックされているかをチェックしてから、OKの合図を送る。電車の発車前のようなベルが鳴つてから、スタッフの元気な「素敵なお旅へいらっしゃい！！」を合図に、口ケットはがくんと振動してから、緩やかに動き始めた。

どう考へてもこれから起ころる旅は素敵とは程遠いだろうが。

スタートから左へ直角に曲がり、口ケットはようやく本来の仕事であるテイクオフ体制に入ってきた。よつするに昇つてます、はい。

「きたきたきたきたあああああ！」

「きやあああああす」――――い――！」

頭だけ見える前の二葉と二葉は周りのタイムスリップする時の吸い込まれるような青白い風景にこれでもかという程の超絶ハイテンション。一方こちらはこれから特攻しようと決意した兵士のテンション

ンである。

三葉はパークーが破けるんじゃないかといつ程握り締めて、眼を固くつむつて震えている。周りの青白い風景に溶け込むほど、顔を青ざめさせていく。

「つていうかミヅバ！ 握るのは俺のパークーじゃなくて安全バーだ！」

まるで聞こえていないのか、その手は更に力が籠る。三葉一体握力何キロあるんだよ！？

その間も刻一刻と地獄への階段を昇っている。

「くつそ！ 強がってたけど、実は俺も苦手なんだあああああ！！」

青白い風景を終え、目の前は真っ暗になつた。と同時に身体の体重は一気に下向きく。  
あ、終わった。

そこから後はもう訳がわからなかつた。暗闇の中で錐揉み状態にされたよし、気絶して暗いのか、宇宙だから暗いのかもわからず、三葉を守るとかそれどころではなかつた。

まるでどん底に落ちていくような感覚。

一葉と二葉がどんな声を挙げていたかとか、宇宙の星々がどうだったとか、そんなものを見る余裕は毛ほどもありやしなかつた。

宇宙飛行士つてのはただただ尊敬に値する。

こんな状態で風景を見て「地球は青かつた」なんて言つ余裕があるんだからな。

地獄の旅を終えて、俺達は無事（？）帰還した。

「おかえりなさい！」

スタッフの呑気な声によつやく我を取り戻して、安全バーを外す。定まらない視界のまま「一スター」を降りると足元が覚束ない。頭にも倦怠感を覚える。

「…・つてあれ？」

三葉はもう俺のパークーの裾を握つてはいなかつた。そして視線は堂々に前を向き、瞳に無数の星を吸い込ませてきたように輝かせていた。

「ミツバ・・・? おまえ大丈夫なのか?」

・・・・・ハルギ、ジユットコースターって楽しいね！」

ええええええええええ！？

今まで見たことないような満面の笑みをくれて、じりかりとした足取りで地上への出口を踏み締めていく。それはまるで宇宙で一仕事を終えて堂々帰還したベテラン乗組員のようだった。

先に出口に出ていた一葉と一葉はベンチに座っていた。

・・・つていうかぐつたりしてないか？

「ヒトバ、フタバ……おまえらもまさか……」

一 わう・・・ 気持ち悪い・・・

ハルキイ・・・あたまががんがんする

一葉と一葉はすゝかりタウンしていた。先程まで

「一葉と二葉はすぐかりタウンしていた。先程までの騒ぎが嘘のように。これじゃあ乗る前とまるで逆じゃないか。まあでも俺は結構すぐに回復した。ジョット・スターはかなり向き不向きがあるらしいからなあ。

「おまえら乗つたことなかつたのか・・・。俺はあまりに得手不得手が顔に出でたから、経験済みかとばかり・・・」  
「乗つたことないよお・・・。遊園地さえ初めてきたのに・・・」  
「マジかよ。んじやなんであんな余裕しやくしゃくだつたんだよ?」  
「楽しそうだつたから・・・」

正直遊園地に行つたことがないというのは意外ではあつた。まあ俺も母親が生きている時に一度だけ連れて来てもらつただけなんだが。

「・・・もう一回乗りたいなあ・・・・・・」

三葉が怪我人に立てと言わんばかりに追い打ちをかける。

「ま、また、ミヅバ。とりあえず色々乗らないと勿体ないから、後でまた時間があつたら乗ろうな」

「・・・うん！」

連續なんて堪つたもんじやない。夢の国がそのまま夢になりかねんからな。

先程とは打つて変わって元気な三葉を見て、一葉と一葉はひたすら驚いていた。

10分ほど休憩を挟み、俺達は逃げるよつにスペースゾーンを後にした。まだまだスペースゾーンには、激しいものから緩やかなものまでアトラクションがあるが、全て回つていっては時間がいくらあっても足りないため、まず各ゾーンの人気アトラクションを全て回つたあと、時間が余つたら残つたアトラクションにも手を付けようということにした。

というわけで、俺達は次にトウーンゾーンへと足を運んだ。ウエスタンゾーンも同じ距離だつたのだが、そこにも人気のジェットコースターがありやがるので、遠回しに後回しにするように仕向けた。トウーンタウンはおもちゃの街をモチーフに、とにかく可愛い子供らしい雰囲気を醸し出している。先程のスペースゾーンとはもはや別世界である。ここには様々なキャラクター達が、家を構えて暮らしているという設定になつており、ウツキーやウキーチャンの家、ロナウドドッグの家などに遊びに行けるアトラクションがある。だから、問題が発生した。

「ロナウドの家がいいぞー！」

「・・・ブーさん」

先程各ゾーン1つずつ回ることにしてしまつたため、案の定一葉と

三葉が好きなキャラクターの家で揉めている。

「そんな太ったブタの家になんか行きたくないやいつ！」

「・・・太つてるのが可愛いの！ 口ナウドこそ、ただうるさいだけじゃん！」

「無邪気なのがいいのだ！ そんな物静かなブタのどじがいいんだつ！」

「・・・フタバはうるさすぎなの！」

「ミツバこそ静かすぎだつ！」

「なにおー！」

またまた小突き合戦が始まる。つていつかいつの間にか途中から口ナウドとブーさん関係なくなつてるぞ。それに三葉と喧嘩してゐる三葉は全然静かじやないけどな。

「まつてまつて！ ジヤあ間を取つてウツキーの家い」つー

「「きやつか！..」」

即刻却下され一葉はひざまづいて落ち込む。

「どうしたもんかね・・・・・・」

頭を悩ませる問題に俺は大きくため息をつく。それから俺はマップを見て、トゥーンゾーンのアトラクション一覧に目をやる。

「・・・これだ！」

見つけた。

これならお田当てのキャラクターが全員出でてくる。

「急げ！ もうすぐ始まるぞ！」

「「「え？」」「

三人を引っ張つて向かつた先は、N.S.Jのキャラクター達による舞台劇だ。これならばお田当てのキャラクターが仲良く勢揃いすることだらう。

「劇かあ。ハルキ考えたね」

「だろ？ これなら口ナウドもブーさんもきっと出でくるぞ」

一葉も三葉もこれならとお互に納得したようで、よつやく小突き

合いを止めた。

開幕時間まであと5分。建物の前で待たされている集団はかなりの量だ。まさか次の回に回されるなんてことはないだろうな。だがそんな心配は杞憂に終わった。すぐにスタッフのお兄さんが誘導し始めて、大多数の客はあつという間に劇場内に収まつた。

「すっげー人だな・・・」

「ほんと、すごいね」

ぎりぎりで並んだため、最後尾の列に座ることになつたため、俺達の前に座る大多数の人の頭が目に入る。

「なあなあ！ どんな劇なんだつ！？」

「えつと、ウツキーたちがトウーンタウンで大騒ぎ！ 歌つて踊つてパーティーだ！ だつてよ」

「じゃあミュージカルな感じかな？」

「そうだな」

そんなことを話している内に、館内の照明は落とされた。アナウンスの注意を聞いてから、いよいよ幕が開かれる。壮大なBGMとともに、舞台上の風景が姿を現した。

「あ！ 口ナウドいる！」

「・・・ブーさんも！」

舞台の真ん中にスポットライトが当たると、口ナウドとブーさん、ウキーちゃんに他にも愉快な仲間たちが、何やら家中で相談事をしているシーンからのようだ。

『明日はウッキーの誕生日なの！ 皆でサプライズパーティーを開かないかしら！』

ウキーちゃんが大袈裟な仕草で手を広げながら話しだす。

『そななんだ！ どんなパーティーにしようか？』

なんだか得体の知れない青い怪物みたいのが大層な動きで案を引き出す。

『ぱうぱうぱうつー！ ぱうぱつー！』

口ナウドドッグは確かにうるさかつた。

『ドッキリはどうかだつて！』

ロナウドの通訳をするように、猫みたいな女の子がきびきびした動きで言う。なんで犬の通訳が猫なんだというツッコミはなしか?  
『ばかあーはちみつぱーていがいとおもうなー』

『ほがれ』はたみへは二ついかいとおせんたる『キヤラフター』の中で一祭の『いざり』して『あぐー』が

ティーを推奨している。それお前が喜ぶことだい。その後もがやがやと意見が出されたあと、『よーし！ これでウッキーも喜んでくれるわ！』みたいな流れになり、ようやくここからウッキーが登場してくる。

会場はウツキーが登場すると同時にすごい歓声に包まれた。そこらのアイドルよりすごいのではないだろうか。

卷之三

舞台に登場したウッキーは街中に誰一人といない現状を寂しく思つたらしい。

『みんな！ みんなどこへ行つてしまつたんだ！』  
こんな喪失感を悲しげなBGMに合わせていきなり歌いだす。しかも超絶上手い。ビブラートとファルセットを上手く使いこなして、頭に響く伸びるような声を出すウツキー。

「ふと俺の隣を見ると、一葉が眼に涙を溜めていた。

見なかつたことにして、俺は再び舞台に眼をやる。一日中、街の友の家という家を探したが、誰ひとりとして見つからず、失意のどん底に落とされたウッキー。

『僕はきっと悪い夢を見ているに違いない・・・！　今日はもう休  
もつ・・・』

自分に言い聞かせるように現実逃避を決め込んだウッキーは、肩を落としながら帰途につく。

しかし、ドアを開けるとそこには・・・

『ウツキー誕生日おめでとう！――!』

いなくなつたと思つた皆がそこにいたのだ。

『・・・みんな、なんで・・・・・』

『ウツキーが家を出た隙に、みんなで家を装飾してたのよ!』

ウキーチャンは呆然と立ち尽くしているウツキーの手を引いて、ウーティングケーキかといつほど大きいケーキの前に連れていく。

『さあウツキー、火を消して!』

『ぱうぱうぱうひー!』

数え切れないほどの火を少しづつ消していくウツキー。あと口ナウドチョット이라는거。

『みんな、本当にありがとう・・・！僕は幸せだよ。』

神々しい動きを交えて嬉しさを表現するウツキー。

『よーしー、みんなで歌つて踊ろう!』

よしきたという感じで、ウツキーを筆頭に定位位置につくと、平和の象徴のよつ明るいBGMに合わせて全員で歌つて踊り始めた。ウツキーのやつはソロではブレイクダンスまで踊りはじめた。随分多才だな。

「『』来場ありがとうございました。この後もＺＺＺでの一時をお楽しみください」

幕が閉まり、場内アナウンスの言葉を聞きながら、館内を後にする。

「うおおおおおー、いいおはなし大だなー！」

「ウツキー良かつた・・・本当に良かつたね・・・・・

「・・・・・もう一回みたい・・・かも・・・」

碧原三姉妹で劇の感想を零す。一葉なんかまだ泣いている。

俺には茶番にしか見えなかつたのだが、そんなことを言つたら3連チヨックをお見舞いされそつたので飲み込んだ。

「さてと、次はどう行くよ?」

「えっとお・・・ここから近いのは・・・あ、スプラッシュシャーバレ

ーがあるカントリーゾーンだよ！」

「おおおおー！ 最後に写真撮れるやつか！」

「・・・・・わくわく・・・」

カントリーゾーンは大自然をモチーフに、小動物が住む森の中を探検するというゾーンだ。そこにはかなり人気のアトラクションが密集していて、大変混雑するゾーンらしい。そんなんじゃ動物たちが逃げちまうだろ？

「そろそろ昼だし、ついでにここで飯食うか」

「そうだね～。・・・あれ、スプラッシュシャーバレー・・・？ 何か

忘れてるような・・・」

「ん、なんかあつたつけ？」

「・・・氣のせいかな！ いこつ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4267z/>

---

クローバー（2）

2012年1月10日21時49分発行